毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治三十年五月廿五日發兌

第百貳號

口繪＝藤原百川　社説＝家庭文庫と傳記書類　史傳＝程婆物語（一栄庵）

佛國二大女畫家　黄花女史
撫子　桐栖舍女史
田園雜興（五）　不二行者
露間の命　秋草女史
薔薇姫　えい子
野遊　花村
日の出岩　勝間禪夢

文藝＝新茶を愛でゝ（千種女史）家政＝老主婦の物語、鶏卵殻の利用、赤兒の睡床等其他手藝案内、近著紹介、社文一班、交詢、雜錄等

新刊書發賣

木戸孝允

定價廿錢
郵税四錢

本社出版の傳記評傳各書は世已に定評あり、其今日に至り重版續出、盛に世の需めに應じて止まざる以て各書の價値を評定するに足りぬべし。今本書「木戸孝允」評傳刊行成る、此書孝允の成長より起り、其の艱難備さに嘗め、遂に維新の鴻業を翼成するに至り、記事詳密、筆鋒周匝。附するに諸建白書及詩文を以てす、皆是れ經國慨世の大文字也。

世界叢書第三冊

マゼラン

挿畫
定價廿錢
郵税四錢

百難を排し萬苦を嘗め目的大半成就し身は異域の蠻手に殪る、マゼランの傳記は一部の「功名難」史也、又大なる喜悲劇也、此書彼れの豪氣大膽世界一周の卒先者として如何に苦心慘憺せしかを記述して餘蘊なし、行文流暢、毫も譯文難澁の通弊を見ず、ダーウヰン（世界叢書第一冊）を讀み、ジールド（同第二冊）を讀み、而して此書に至る、自ら雪月花三色の妙味あらん。

近刊書

徳富健次郎著
十二文豪第十卷

トルストイ（肖像入）

定價廿五錢
郵税四錢

トルストイは實に露國の一異物、のみならず世界の奇觀である。其國柄からしても、文豪としての位置からしても、所謂トルストイ宗の開山たるからしても、今日に比類なき興味を有する人物である。著者の不學無術あへて其面目を詳悉したとは云はぬ。併し微弱な力に出來る丈は盡した積である。讀むも讀まぬも諸君の御隨意とは云ひながら、若も今迄一卷として世に出でたことのないトルストイの一生を兎に角一卷にまとめて、誠實に描かんことを試みた此「トルストイ」の一讀を諸彦に推薦しなければ、著者は諸彦に對して不忠實なるもの、徒諛徒遜なるものであらふ。故に是非〳〵諸君の一讀を請ふのである。

抒情詩

定價貳拾五錢
郵税四錢

抒情詩は國木田哲夫の『獨步吟』松岡國男の『野邊のゆき〻』田山花袋の『わが影』太田玉茗の『花ふゞき』嵯峨の山人の『いつまで草』宮崎湖處子の『水の音づれ』より成る。

抒情詩は今日猶未だ米に値せず、而して吾人の之を作るに止むを得ざるは、吾人の生涯米の外一日の詩なき能はざるを以てなり。

抒情詩は眞情の聲なり、之れを粹して江湖に示すは、眞情を以て眞情を得、之を以て聊か寂寞の情を慰せんと欲すればなり。試みに此の集を繙て見よ、戀に罔ゆるものあり戀に狂へるものあり、戀に哭けるものあり、煩悶の妖雲を排つて眞如の清月を觀破せんとて猛進するあり、父母兄弟の情を歌ふものあり、敬虔の生涯を歌へるものあり、都會の世塵に背きて山野の老人小兒の心を歌ふものあり。

此等の詩、苟も以て世の同情を得るに足るものあらば、江湖の博雅願はくは一讀を賜へ。

民友社發行

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 吉崎四吉　編輯人 金子佐平

本社電話番號本局七十番

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十年五月廿五日發行

家庭雜誌第百貳號

目録

口繪

藤原百川……(久保田米齋)

社説

家庭文庫と傳記書類……一

史談

佛國二大女畫家……黄花女史…二

程婆物語……赤松子…七

世界第一の鬼

文藝

撫子……桐廼舍女史…一〇

田園雜興(五)……不二行者…一二

新茶を愛で侍りて……茂川千穂子…一八

露間の命……秋草女史…一八

叢談

日の君……勝間禪夢…一九

薔薇姫……えい子…二七

小説

野遊……花村…三四

ブリタニー婚禮の奇風

近著紹介

健病のしるべ……四〇

家畜内學科……四〇

世の中に恐しきもの

老主婦の物語(下婢の使ひ方)……たんぽゝ女史…四一

鶏卵殼の利用……四六

赤兒の睡床……四六

手藝案内

毛糸編物(附薄圖)……きよ子…四六

社交一斑

流行の染……流行子…五〇

夏衣……五〇

交詢

雜録

藤原百川……五二



藤原百川



家庭雜誌第百貳號

（明治三十年五月二十五日發兌）

社說

家庭文庫と傳記書類

未だ世慣れぬ心には何事も珍らしく、左までならぬ事にも小さき胸を跳らしむるは其常也。特に銘々の身に最も切なる前人の言行に至ては、小兒の心を激勵して之を軟かき腦裏に刻むこと意外に深きもののあるを見る。

樹皮に刻みたる文字は樹木の成長すると共に膨大し行くとの譬の如く、軟かき腦裏に刻みたる印象は容易に滅すへからさるのみならず、遂に終天立志の基なること、古來其例し少なからず。或は母か添乳の隙に語り聞かせし簡單なる英雄の事績が端しなく英雄を作る端となり、或は少時孤燈の下に偸み讀みたる偉人の言行錄が案外にも人をして大業を企圖する念を發せしめたるなど、傳記の感化によりて興起したるもの比々これあることは、今古の偉人傳が多く語る所にあらずや。

古の人も云へる如く、言行錄は大人君子の生ける血なり、香料を以て腐敗を防ぎ謹み貯えて後世に遺せるものなれば、言行の不死と共に、感化力も亦不死にして、極高の言行至善の儀範は百代の遠きもよく後人をして景興企慕せしむる力存するか故也。

九重に今もますみの鏡こそ　猶世を照らす光りなりけり　後醍醐帝

况や人の鑑をや。

是の故に家庭文庫に貯藏すへき書類は、第一に好傳記書を擇ふを要す。文人傳可也。武人傳可也。政治家傳可也。經濟家傳可也。宗敎家傳敎育家傳可也。社會改良

家傳慈善家傳可也。貞女烈婦傳可也。偉人傑士傳可也。英雄傳可也。發明家傳可也。冒險家傳可也。唯成るべく變則の英雄豪傑傳よりも、正則の大人君子傳を善しとするのみ。例之はワシントン傳の如き、フランクリン傳の如き是也。

又發明家の經營慘憺萬苦千辛したる事蹟の如き、冒險家の遠洋航海或は異境探撿等の物語の如き、特に小兒の好奇心に投し、之を語り聽かしむるか、若くは年稍長して自ら之を讀むとわらんに、如何に彼等か小さき眉を昂げ、小さき目を丸くして、熱心に之を企慕仰與すへきぞ。

蓋し人の傳記は、彼等か爲に最も大なる感化力を有するものなるのみならず、亦彼等か爲に最も大に愛好せらるゝものなることを知らずや。

吾人は世の家庭が、其精神的食糧の貯蓄所として家庭文庫を設くるに方り、首として意を用ゐて、傳記書類の好良なるものを擇ばんことを勸告して止まざらんと欲す。以て稚きもの丶寢物語に資し、以て稍長せざるもの丶閱讀に便じたらんには、思ふに其益少小にあらざるべし。

家談

佛國二大女畫家

黃花女史

佛國第一の女畫家は誰ぞと云はゞ、苟も美術を知らん程の者は、ロザ、ペアンハウルと答ふべし。ロザは當年七十六の老媼なり。千八百二十二年葡萄酒の產地として名高きボルドウに產れぬ。父は圖畫の教師なり。父の女なればにや、ロザは四歲未滿の頃より筆を弄び、吾丈のとゞくかぎり壁といふ壁は書き散らしの筆跡にうつもれぬ。また紙をきりて牧者、羊、牛、馬、犬な

どの形を作るを好みぬ。ローザは男まさりの氣丈者なりき。祖父常にローザの母に云ひぬ「あれは娘と思ふや。あれはペテコート着た男見なるぞ」と。其内生計の都合にて、巴里に移り、貧窮はげしき間に母を失ふ。ローザは十三なりき。父は裁縫師になさん積り



なりしが、ローザは嫌ひて繪の彩色紋摸樣など書くを好みぬ。學校に行きても、男兒仲間に立ちまぢりて喧嘩鬪爭に負けし事なく、或時敎師が秘藏の薔薇花を木刀にて打破しゝかば、遂に退校され、此より始終家にありて、父が毎日圖畫の敎授に諸處馳廻る間、獨り天井裏の畫室に留守して、終日畫筆を弄びぬ。或日父外より歸り見れば、ローザは櫻寳を油繪に寫生しつゝあり。父暫しぢつと見詰めてありしが、はたと手をうち「此は妙。此れより御身は眞面目に勉強するこそよけれ」とて、いたく其女を奬勵しぬ。ローザも此より發憤して最寄の集畫館展覽會などに赴きては、大家の作を摸寫し、衣裳外觀の事などは更に頓着せずして、活潑に振舞ひければ、人皆ローザを「小さき騎兵」と呼びて、初めは美術學校の生徒などいつも笑ひ嘲り居りしが、後には其運筆を見て、冗談も云ふものなきに至りぬ。ローザは更に動物の研究を始め、近郊の百姓屋に滯留しては馬、羊、犬など寫生せしも、始終動くものとて思ふやうに出來ざれば、更に動物の筋肉骨格など學びて解剖をも試み、また石膏細工の摸型をランプの光にて摸寫するなど必死に勉強して、二十三の時初めて展覽會の賞牌をうけぬ。父も娘も畫家なれば、着物はよごれ、座は室内に堆く、父給金を得れば、一ト握り室内

にまき散らし置きて不時の用に備へ、金盡きて窮する時は畫板の後、紙の間など探して一フラン五フラン見出しては二三日を過ごしぬと云へば、其生活のさま推して知る可し。程なく父死して、ロザはいよ〳〵一人立となりぬ。

ロザの得意とする所は動物にあり。天才ありしは云ふ迄もなけれど、其苦心勉勵の程中々云ふも愚なりき。猶も動物を研究せんとて、ロザは女の身にてありながらルールの家畜屠殺場に滯留して、賤しくむくつけき荒くれ男の中に立まぢり、色々の辛苦困難を忍びて朝夕研究に從事しぬ。されば年寄の屠人某大に感じて、ロザを保護し、荒し男共の無禮を嚴しく制し、其食物の粗末なるを見ては憐むで食を供するともありけり。耐久の勉勵は成功を以て酬はれぬ。ロザの技は進みぬ。「馬市」といふ繪によりて、其名始めて大に揚りぬ。此馬を畫く爲めに、ロザは警視總監の免許を請ふて男裝して馬市に往來し、研究に研究を重ねたる程にて、此を畫きしは三十二歳なりしが、此によつて始めて非常の名聲を轟かし、佛蘭西に女畫家ロザパアンハウルあること知らるゝに到りぬ。此畫は當時四萬フランにて賣れしが、後には三十萬フランにて轉賣せられしと云ふ。成功はロザを眩まさゞりき。此れより方々に旅行してはいろ〳〵の動物を畫き、後にはフォンテンブロウの森に家をたて、女服は仕事に不便なりとて男裝して、親しき女の友達と二人住みぬ。ナポレオン三世皇帝たりし時、勝手に森に遊獵する特權を與へ、又或日ロザは森中に寫生しつゝありしが、ユーゼーニー皇后馬車を驅り來りて名譽勳章を授け、またしば〳〵宮殿に招きて優待しぬ。婦人の畫家にして名譽勳章を受けしものは、佛蘭西ありてよりロザを以て初めとするなり。

ロザは眞に佛蘭西女なり。普佛戰爭の時、普國のフレ

デリツヒ、カル皇太子は豫ねてロザの名を聞かれしかば慇懃の意を表せんとて、特に身上資財安堵の狀を送りしに、ロザは憤然其狀を引裂き敵の保護は受けずと叫ひぬ。且つ戰爭中は住家を失ひて困れる百姓どもを吾家に住ましめ或は助けし者數知れず。やがて休戰となりて、日耳曼の某公子訪ね來りしが、ロザは肯て面會せざりき。實に此戰爭中には畫筆も抛ち、讀書などして鬱々と日を送りぬ。平和成りて、ロザは再び氣を取り直し、或は動物園曲馬などにゆきては豹獅など研究し、



技いよ／＼進みて、動物につきては比びなき名家となり、先年のシカゴ博覽會にも出品して、此節を以て更に名譽隊の士官となりぬ。今や年七十を過ぎて、名各國に聞へ、富み且豐かなるも、ロザは今に男まがひの奇なる風俗して、質朴なる生活をなし、一身を繪畫に委ね居るなり。常に云ふ樣「繪畫につきての吾願は、唯二つあり。第一は『眞に近いやう』と云ふ事にて、第二は『なるべく筆少なに』といふ事なり、自分は始終斯くせんとつとめてあかず、是に因て心にいつも幸福あり」と。ロザの如きは此道の一豪傑と云ふ可き人なる可し。

若しロザを佛國女畫家の大統領とすれば、副統領は確かに婦人繪畫、彫刻會々頭ブルチニー、デモン、ブルトン夫人なる可し。夫人は未だ四十に滿たざれども、名は世に隱れなし。ロザが動物を畫くに長するに反し、夫人は人物畫殊に母子の愛を畫くに妙を得、當時婦人

畫家中一人のよく夫人の筆力に敵するものなし。名譽勳章を受けし婦人は、ロザの外にブルトン夫人一人あるのみ。

父は有名なる畫家ジユール、ブルトンなり。夫も名ある畫家アドリアン、デモンなり。母方の祖父も名高き畫家、叔父も夫の師なりき。夫人は實に畫に浸りて生長しぬ。鉛筆は幼少よりの玩具なりき。十四になりし時、父は正式に畫の敎育を授け、十九の年には展覽會に出品しぬ。其畫大に評判よく、審査官一同賞牌を與へんとせしを、父は吾女の斯く速なる成功に惑はんことを危ぶみて、百方抗辯して襃狀にとゞめぬ。境遇は幸福より幸福に移り、畫家の女なる畫家は幾くもなく畫家に嫁しぬ。

夫人は實にやさしき女性なり。幼少より子供を愛し子供を夢みぬ。常に云ふ樣「母子の愛てふものは婦人の最も美しく且健全なる光榮なり。母子の愛こそ、婦人伎藝美術のインスピレーシヨンの泉なれ」と。實に夫人の手になりし繪には、殆んど一として母の愛のあらはれざるものなく、婦人にとりて絕好の畫題たる此母の愛は、有力なる夫人の筆に入りて、幾多の名畫をなしぬ。夫人は巴里より少し離れし田舍に住み、夫と諧室をならべて、絕えず勉强す。特に夫人の畫室にはありとあらゆる子供の畫、例へば乳のめる、母の膝に抱かれたる、砂上に坐れる、波に追はるゝ、笑へる、怒れる、泣く喜ぶ子供の繪所せき迄集めあり。夫人は一枚の畫をかくに、必らず同じ題目につきて體度服裝をいろ／＼にかへて幾枚となく下繪をかくといふ。夫妻の間に娘二人あり。猶幼なけれど、流石に親の子にて、最早いろ／＼の繪をかきては彩どるを樂みて、父母の畫室にある繪は悉皆吾玩具の樣に覺え居て、父母もし畫の所在を忘るゝ事あれば女兒等直ちに探し來るといふ。

夫人の一家、年の半は北方ウヰッサルの漁村にゆき、或は繪の後景をとり、或はモデルを見出し、砂、岩など寫生す。夫人は名あがるも浮かれず、家に引籠り繪にのみ熱心になるかと思へば、此處に來る毎にいろ〳〵村のためにはたらき、ために名譽勳章を受けし時の如きは、村民一同擧りて祝日のやうに喜ひぬ。夫人は繪に巧みなるのみならず、また文筆をよくし、漁村の生活につきいろ〳〵物語を書きぬ。一樹の梅は滿林の香なり。夫人世に出てゝより佛國文部省も初めて婦人の美術學校に入るを許すに至りぬ。



婦人にして或事を成さんずる者は、男子に劣らざる耐久督勉を經ざる可からず。婦人にして或事を成さんには、尤も我天分に適したるものを撰ぶに若かず。佛國二大女畫家の經歷は此二の敎訓を我等に與ふ。

程婆物語

赤松子

足るを知る事は人として何よりの心掛なるべし。聖人君子の誡も皆歸する處はこれなり。程を忘れて己れの慾に走せ。成るまじき事を成さんと欲し。吾力に遂げ得べきもあらぬものを。强て遂げんと望めばこそ。失望憤

怒怨恨猜忌悲歎等の苦をうけて。人と爭ひ戰ひて身命をも失ふに至るぞかし。

備中の國某の里に一人の嫠婦住みけり。頭の髮の雪となる迄で老ひにけれども。そを養ふべきかゝり子ある事なし。獨一人いぶせき伏屋にすみて。紡績り苧麻うみて其日〳〵の食料をば得つ。其性質いとやさしくまめ〳〵しかりければ。其邊の里人等こを憐み思ひて。彼方此方よりこれを備ひ。其報にとて金穀さては時折〳〵の衣など與ふるに。其報酬の分に越えて多かる時には。如何にこれを强ゆれども敢てとらず。『物には程が御座ります。其程を忘れますと罰が當りまする』と。身に節儉を行ひて吝嗇ならず。衣服飮食其程を守りて。如何なる事ありて。如何なる人に强えらるゝとも。其程を忘るゝ事なし。閭里これを愛敬して程婆と呼ぶ。自らもこれをもて名とし。いと樂し氣に日を送り居たるに。或日如何にしけん日爛くるまで起き出です。其隣れる家の人々。日頃は起き出づる程には必ず起出でたる婆の。今日は病にやかゝりつらん。早や九皷（今の正午）にも間もなきに。未だ起出ざるこそ不思議なれ。兎も角も起して見ばやと。呼べど答なく叩けど出でも來ず。家の中は唯閴寂として鼠などの走る音すなり。いよ〳〵怪しみて戶を押ひらき入りて見るに。鴨居に紐うちかけて自ら縊れて死せり。コハそも何事ぞや。かゝる憐なる事こそなけれと打驚きつゝ。走り廻りて里人に告げたりければ。多くの人走せ集り。やがて里正も來りて。其何故に縊れたりけん。思ふに氣の狂ひたるにやなど語り合へりし內に。屍躰の袂より一通の遺書ありしをば見出しつ。額打集め肩と肩つき合して讀むに。

程婆は子といふものなけれど。皆樣の御恩を蒙りて。雨にも濡れず。雪にも凍えず。着る物食ふものに事欠ず。年月を安けく送りて齡も七十に至りたれど。

無病にして足腰の痛みも覺えず。人に一文の借錢いたしたることも候はず。着類の餘れるをば賣りて棺を購ひ。鍋釜さては古鐵をば粟となし。炊ぎて讀經の僧にまゐらせたび給へ。一筐の績苧は酒に換へて。皆樣の御骨折にいさゝか報ひなんとこそ願ぎ候ふぞや。命長くして程を踰ゆれば。終には病み臥して衣食だもつきぬ。重ねて皆樣を煩はすのみか。棺の代。讀經の僧に供する粟飯。御骨折に報ひまゐらす酒にかふべき品も無きに至らん。命の程を知りて程に死するは。程婆の程にて候ふなり。いざおさらば

と餘りの事に呆れたるもあり。其心懸の殊勝なるに感じ入りて轉た涙にくるゝもあり。今は唯其詞にまかせ厚く弔ふこそよけれと。何事も遺言の如くして埋葬したりしとなん。程を知るはさもありなん。天の與ふなる命をも確むることかは。程婆も程に迷ひて程を忘れたりといふべし。

世界第一等の冕

世界の中に最も尊き冕を戴くものは英利士の女王と葡萄牙王の二人なり、女王ビクトリヤの冕は最も有名なるものゝ一にて、數個の艷麗なる紅寶石と一個の鮮潔なる碧玉とにて飾られ、その他微小なるものには、十六個の碧玉、八個の綠寶石、四個の紅寶石、一千三百六十個の白色金剛石、一千二百七十三個の薔薇色金剛石等を保ち、尙又四個の大なる眞珠と二百九十六個の小なる眞珠とを添へ加へありて、その價實に二百萬弗に當るといふ、されど此の女王の冠にも遙かに立勝りたるもの尙一個あり、そは葡萄牙王ドン、カアロスの冕とす、これぞ世界第一等の冕にして、その價値少くとも六百五拾萬弗以上のものなり、王の冕に飾りたる十字架は最も光澤よき四個の大なる金剛石より成り、之が蓋には彫刻無き紅寶石を用ひたり、その他冕の總ての部分もありとあらゆる寶石珠玉を以て裝飾をなせり、然るに惜しむべし、露西亞の故帝崩御の際此の王冕より一個の寶玉を剝き奪りたるものありて、今尙その行方を知らずといふ。

文藝

撫子

桐酒舍女史

花の色香をはするゝとにはあらねども、青葉の露のをちかへり鳴時鳥、聞んと思ふはなべての心なるべし、されば日光箱根などの温泉宿は夏を時として、下女料理人も多く雇ひいるゝ例なれば、都戀しの藪鶯も片言ながら御の字言葉の稽古などして、此召集に應ずるを上なき樂と思ふなるべし、よるとさはると江戸風の品定めに手元の用のおくるゝも知らず、まして湯本の福住は遊山の外の旅人も、話しの種子と爰に宿れば其繁昌いふばかりなし、朝立の客逗留客の膳拵へに世話敷折から、門口より會釋しつゝ入來りしはまだ十四五の小娘にて、洗ひ晒した中形の浴衣に帶だけは、此頃仕立たが思はるゝ緋太織もあはれ半ば隠るゝばかり、風呂敷包を背負ひたれど、玉の光は埋れず涼しき眼元にあふるゝ愛嬌、磨きて見たしと誰れも噂するとかや、下女等は目早く見とめチヤ「ナアチヤン早いねへ今朝は忙しくつて眼がまはりさうだから、おまへの來るのを當にして待つて居たよ、御氣の毒だが商ひはあとにして一寸此御膳を、上段の間へ出しておくれそれに彼の御客樣は、大層おまへをほめて被爲入るよと、いへば娘はホヽと笑みそれはマア有難い事ね、併し妾は一ツでも御家の御用の間に合は何より嬉しうござんす、母さんもそういつて居ます始終御世話に成てゐるから、おまへに出來るだけの御用はお爲つてと、猶いひかけしが俄に心付たる如、包を下し御忙しいのに、とんだ御喋口をしてといひつゝ膳を請取て、いそ〳〵として立て行く是より三週間ばかりは、例と成て客も待樣になりき、渠も次第に馴て半日位は此座敷で笑て暮

す事もありき、併し外の宿を廻るより寧渠の利益は多かりしならむ……

こちらのはお烟草箱是は山椒の御盃洗此御盆も面白い細工でと、幷へ立るを客は押止め 客「ナア坊最早今日はそんなに廣げるには及ばないと、いはれて娘はハッ卜思ひ極り惡し氣に仕舞かゝるを 客「イヤ仕舞ふには及ばぬみんな買てやると聞て娘は二度吃驚、嬉しさ顏にあらはれしが何やらむ胸騒して、聲もやゝ震へッ、尤も氣遣はしげにそれでは最早御立になりますかと、客の顏を見あげぬ客は淡泊にア、と答へぬ、愛らしき眼元は忽ち無量の露を含ぬ客は始めて心付 客「ナア坊何樣か爲たかと柔和しき問ひに 娘「イ、エト答へた客は猶不思議そうに 客「そんなら何故平日のやうに笑はぬと押返したる問ひに、今は堪へられず何だか御別がと……あとは口籠りて撫子の雨になやめるが如とは此少女を形容する言葉ならんか、客もそゞろに感じつゝ猶懇に慰めて「ソレは誰れでも馴た者に別れるのは可厭だけれど限りもなく遊で居る事は出來ない、急用が出來たから直に歸れといふ手紙が來たから最早今日は延引されない、併し近内に又來るから其時は汝の御母に話しを爲て一所に、江戸へつれて行て嫁にするから夫迄は屹度何處へも行ずに待て居な、それとも江戸へ行のは可厭か江戸には面白い寄席や芝居も澤山ある「ナニ江戸へは行たいけれど「フウそんなら嫁に成のけいやなのかと少し眞顏になれば、娘は恥入それでも賤しい姿……及びも付ぬと云ひたけれど舌は動ず、客は打笑ひそれしきの事決して心配するには及ばぬ、僞りならぬ證據に何かなど暫時考へ、行李の内より取出したる錦の金入巾は若干か知らねども、是は買物の代だと與ふれるを娘は、狼狽押戻しそんなにいたゞきますと母さんに叱られます「何代でわるければ置土產としよふ而して汝の名を未だよく聞かなかつた、なつか、

なほか、皆んながナアチヤン〳〵といふから遂ナア坊と覺て仕舞た、がナァ坊では手紙もよこせない、エナソトいふのだ、と覗き込れていよ〳〵恥入、最前よりまるめて居た袂をはなし、一寸指さしわれで御座ります「撫子か成程能似合て可愛らしいい、名だ……廊下踏ならして入來りし氣輕の手代無造作に會釋して、若旦那御荷物は只今御先へ出しました總夫も、御待申て居ますから御支度がよろしくば直に御立と致ませう、ヲ、御氣に入のナァ公もう今日は御別れだから何も御目にかけるには及ばない　客「イヤ今日はみんな買て仕舞た　手「エ、コリヤア驚いたもう些し早ければ重荷に小付位て濟だが、今ぢやあ眞實に御荷物だ爰に至て拙も進退谷まつた　客「ジヅ〳〵いふな高が子供の背負だけの物だ其處いら迄貴樣の肩へ乘せて行けどう世乘りか、つた船だ外に仕方はないと諦めろ　手「コレハ〳〵、益々有がたい御意の趣き最も忠義の一ッとあきらめませう、兎角子供でも女には勝てぬ世の中ナァナア公と高く笑へば撫子は顔赤らめて幽に御氣の毒樣（以下次號）

田園雜興　五

不二行者

繍眼兒

曩昔上野の動物舘に遊びける時、小禽多く集りたる室の前に至りて良久我を忘れて佇立みたることありき。鶯に似たれど面影の何となく深山幽谷の樣を帶びたる十姉妹、斑紋の綾ある金翅鳥、軀圓らかに宛然よそ〳〵しげに擧動へる相思鳥、深窓の紅閨に起臥すなる姫にも比すべき黃金雀、さては拙老婆の心得容なる、紅雀の篤實しき、文鳥の從容たる、玄やかたち雀のその名應しき態容なる、かれ等小さきもの皆そが自由なる野、林、森、谷、山等天然の逍遙境より、この牢獄の

如き罘罳の裡に閉ぢ籠められながら、なほ少しも究屈不平を知らざるが如く、各自嬉々歎ばしげに快活く、囀り歌ひ舞ひ躍り跳ぶ狀態の、眞に自然なるを觀ては、深くかれ等をおもはしめたる眞宰の造化恩澤の洪にして且微妙なるを感ずると共に、やがてわが憶想の眼には、かれ等と同類なる一箇の愛らしき小禽の面影を映し、わが心の耳には、そのおかしき囀哢の調ある聲を聽きたり。

青山の眉黛にほやかに笑みたる、白雲の袖ふりかざしてふるまひたる、小川の淸くさゝやきたる、すべて忘れ難き田園の風物と、宛然世を外にせる閑生活の忘れ難き棲居との記憶の、わが胸懷に忘れざる間は、永く此愛すべき小さき禽の記念をもわれは忘れざるべし。況してや今、都門の塵ぶげく烟とたちたる大路に立列なる瓦甍の擔端にも、狹く暗き小路の格子戸の柱などにも、この愛すべき小禽の同胞は、細小なる籠の棲居を自由なる天地にかへて、その同じき囀聲と擧動ふ態とを目前われに視すをや。

所謂愛らしき小禽とは、わが童僕が何處よりか籠に捕へ來て、わが閑居の軒端に懸けし繡眼兒にこそ。

綠の羽を衣と纒ひ、黃なる纖き毛を濃かに胸に蔽ひ、小さく圓き頭顱に嘴細く、眼醒むるばかり白き瞼の緣を輪形に拖き描きて、限なく愛らしき容を具へたる眼色は、いと敏げにも見え、擧動の輕く快活なるはかれの衆禽に殊さらだちし點なるべくや。

かれ昨日までは天の給へたる餌を山の陰に啄み、天の流せる泉を溪の隈に嚥み、森の閨房靜に小枝の枕、木葉の蓐安けき夢を結びたらむに、今日は竹格子の狹き籠に鎖されつ、自由なる大空、高き梢は見えながら翔けるに難く、飛ぶに便なし。身悶え羽ばたきして天然故郷の逍遙に焦思るゝほどに、飢にはやがて食を欲ひ、渇もそれに伴ひ來る。四邊人無き軒端の棲居、少

時身を塒に憩はせば、水は小さき鑪に堪へ、餌も同じ器に盛られあり。かれは總べてを忘れ措きて嚥み且食む。人影近くときまたも躍り狂ひてその幽閉の棲居を出でんと悶ゆ。かく同じ擧動をば重ねゆきて、終にその濶き自由の天然境に返ること難く、幽閉の生活はやがて幾日を經たり。

さるほどに人はさらにおのれを害せず妨げざるのみならず、朝な朝な來りてその格子戸より餌と水とを給へゆくなり。天が給したるものを今は人の手より與へらるゝなり。最早次に人は恐ろしからずなりぬ。羽ばたき悶えて苦まむよりは、そがまゝに靜に從容きて餌と水とに飽かむことの安逸をば、小さき胸に知りきや、わらずや。

あはれ小さきこの禽よ。自然の榮光とその樂しき消息とを讃へ歌はむ爲に、天が賦へしその天性は、この靜に從容きたる時に發せではかなはずなりぬ。折から空は清く碧に、花の香浮び樹々の葉緑を吐きて、蝶は迷ひ蜂は遊び、背戸の梅の樹に青雀呼べり、林の奥に鶯啼けり、栗の梢に金翅鳥は囀ぜり、軒端近く噪げる雀さへをかしげなる亂調にてさすがに歌ひ出したり。長閑けき景色に人の心も浮くばかり、宇宙に滿ちし融和の氣は、油の如く小さき胸に溢れ、百鳥の歡聲にさながら「歌へ〳〵」と催されつ、われにもあらず歌ふ一聲。歌ひておのれと心つきてうち傾きたる顏容、世に比ふべきもの無き愛らしさは筆も言葉も及ばざる風情なりき。

一旦歌ひてははや歌ふより他の事を忘るらむ。程なくかれは人に馴れたり。餌と水とを持ちゆくとき、そのをかしき容貌もて愛らしき眼を張りつ、まちかねたるが如き態あり、童僕がかりそめに捕へ來しときあはれなる小禽を天然の自由より奪ひたることをなさずもあれと思ひしわれは、かれが狹き籠に滿足して安定きた

るを觀て、今はたかれを留め置きて飼ひ愛でむ心の童よりは深くなりぬ。

鶯の如き調のよく協和ひたる節奏こそなけれ、かれの歌囀は種々の音調ありて婉轉琅々、雲雀の如くにも青雀の如くにも囀づるなり。かれの際だちて愛らしきは質に人に馴れてその風情の如何にも親しく邪氣無きところにあり。多くの小禽の馴れてもおのづから大人びて人を慮ふ態あるに比して、かれはさながら小兒の如く愛くるしきなり。昔者鶯に金衣公子の名を給ひし唐の帝もありき、繍眼兒とは誰が名けゝむ、われはやがてこの愛らしきものに「緑衣歌童」の名を命じぬ。

この歌童は日を追て其聲高く其調も律侶自ら具はり、戸外の百鳥の聲に和して競ひ劣らず歌ふやうなりぬ。かれは音響の耳に入る毎に催さるゝ如くに歌ふ、戸外に車の轢りゆく音、馬子の俚歌唄ふ聲、水車の響などはかれの歡びて相和する唱歌の伴侶なり、されば われ書を讀む時、園林逍遥に吟嘯する時さては客と語談の興に入りて笑ひあふ時など、必ず聲一層よく張りあげて鶯燕の語を學び雲雀青雀の聲に似通ひたる嬌音清音幽音宛轉として餘念無く歌ひ囀る。その氣あひを觀るに、眞に無心無意に一身を天地の融和せる氣中に投じて、滿足と平和とをもて唯管に天然の榮光を讃美するに似たり、之に對するわれもまた無心に無意に天地の和氣に化せられて恍然として凝視つゝ、虛空に魂を浮ぶるなり。

わが愛はいよゝ深くなりぬ。天地浩く自由なる樹林に放ちやりて、人爲の境界より天然の化育に任せんは、かれ歌童にとりて如何に歡ぶべきことならむ、その巧なる美しき歌聲は更によくとゝのひたる律侶にてをもしろく唱へらるらむ、と思ふにも似ず、わが手より離すことの惜くて、さながらわが子の如く愛るに至りぬ。天然の子を人爲の手に奪ひたるはわが過誤なりしや、

あらずや。

歌童は清き水と、雜魚と粟と糠との擂餌とに日々の糧を給せらる。折々小蜘蛛、蠅などをとりて格子の邊に差し出せば、一瞥躍りて喜び啄む。かれは砂糖を好む、菓子を食ふ。甘藷の烟芋はその最も好むところ、山間の牧童などの手に飼はるゝものはこの烟芋こそかれの常食なりけれ。終日糧に飽き、歌につかれ、黄昏の景色淡暗うなる頃、籠に幕かけてわが室の隅に移せば、かれは憩ふべき時の來るを知りて、小さき頭顱を小さき羽翼に埋めさらぬだに圓らかなる躰軀をさながら毬の如くなして、靜に眠る。われ讀書の夜課既に了りてやがて寢ねむずる時、歌童は如何に眠り居るらむと思ひつゝ、忍びやかに幕帳をあげて窺へば、圓球は忽然として頭を擧げ燈光に著るく見ゆるその瞼を瞠りて訝るやうに見上げたる愛らしさ、「如何にあはれにも愛たき歌童よ、汝が眠は安きか」など無意なる獨語するに、かれは怪しく驚くべきことも無きを見てまた頭を羽がひに埋め毬となりて眠に入る。幕をかけおきて臥床に横はりしわれは、夢に歌童と無何有の鄕に遊たりき。」

花散り鶯去りて世は夏景色、青葉の陰茂く、百鳥の聲は里にあとを絶ちて、蚯蚓、蛙の聲夕にかしましく聞ゆる頃となるに、わが軒端には「歌童」の囀聲日每に絶えず。

或朝餌を給へむとて籠に差入れたるわが指に、かれは慮氣もなく留まり、嘴もてわが爪の尖を頻に突く愛らしさに、掌を擴げて捉へやらんとすれば、はじめて驚き退りぬ。しかく馴れ來て後には、籠の戶空しことありても出でさらむともせずなりぬ。試に鏡をもて籠に當つれば、一樣に愛らしき一箇の小禽見ゆれば、かれは友の來ると見て忙はしく近寄るまゝに、嘴と嘴とはしかと相着きぬ。訝しき顏つきせしがやがて聞えぬほどの囀聲さながら私語くやうに漏らしつ、顏を

をひねり横さまに鏡のおのれにすりよりぬ。あはれ「歌童」は鏡中のおのれに對し所謂繡眼兒の押競を試みたりしなり。如何に押競する効なくてやがては嘴もて突き挑みぬ。されど戰もまた効なく終に離れて餌を啄みけり。かくまで馴れたるかれは、また人の指などに恐るゝことなければ指もてかれの頸を撫づるに、いと心地快き態して瞼を閉ぢ頭を垂れて眠るが如くす、胸を撫づれば仰ぎて頸を延し倒れむとして初めて躍る。後には是を「繡眼兒の睡眠術」と名けて折々かれを挵う毎に快く娯しき容態をもて、人の手に委すなり。かゝるあど無き慰樂の裡に限無き天然の愛なるものをわが知るにつけても、その天然の子を永く人爲の手に留めむは心ならず、或朝籠を森に持ちゆきて愛らしき「歌童」をその天然の故郷に歸らしめんとせるに、かれは漂然として飛び去りしが、久しからずしてまた籠に歸り來りぬ。かれは既に天然の境界より人爲の籠居に化せられて、再び自由に浩大なる天地に翱翔するの力を失ひしにやあらむ。

されどわれは永くかれを愛せむと思へば、永くかれを自由浩濶なる天然の手に委すのよきを思ひ、家に歸りて籠を開き、かれが出で入るにまかせ置きぬ。毎日かくして後或朝かれは出でゝ復びかへらずなりぬ。一日二日は背戸の林にその聲聞えたり、われはなつかしさに籠に歸れかしなどまた思ひつゝ、聲をたどりて林を逍遙ひぬ。日を經て聲は聞えずなりぬ。水に浴するをかしき姿、メスメリズムのをかしき態度、その愛らしき面影は、竟に見えず永く天然の故郷に歸りゆきたりけむ。われは今もなほこの「歌童」を唯小さき禽とのみは思ひ難きよ。

新茶を愛で侍りて

茂川千種子

五月雨はふりも降らすも、大御代のめぐみの露のうるほひに、いつらをとはす畑に庭に、木のめおほし立つるを見てけり、さはれ古より今も世にたかくかをれる名所は、宇治の山里にやあらん、年毎に新木のめの出て初ては、かしこき雲の上にものほれるとか、いとかくはしきはえにそある、されは海路遠くへたてし外國人も、朝な夕なにたしまるゝこそ、嬉しけれ、此木のめ煮るにも、さま／＼のゐやあれは、みやひの道にこゝろさす、者は男もをみなもそを學ふによて、おのつから心もふるまひも、たゝしうやなりなむ、猶うき世をよそに住なせる老人も、花なきのちのなくさめに、新木のめを友として愛てはやしつゝ、軒端にかゝる雨ぞゝきも、松風の音と聞なして、千代もへぬへき心地すと、たゝへらるゝこそ、うらやましきの限りなれ、

新木のめかをりを汲みていひはやす
　おのか心の恥かしきかな

志つの女か手に摘まれたる木のめさへ
　世にかくはしき名をし立らん

露間の命

秋草女史

草の上に一夜をあかす玉なへや月も白玉したひきてうつろふ姿の影きよしされどはかなし露の玉茜のさすをうらみつゝなく／＼おとすひとしづくおちてあとなきかなしさよあゝなさけなや露の玉夕邊にむすびそよ風に吹かるゝおりもつかの間にすぎて旭にきゆる哉おもへばもろし露間の命今はむかしなつかしゆかしのたらちをはあしたの露とも路ともに浮世をすてゝ長のねむりにつきにけりあとに妾はたゞひとりたのむなぎさの濱千鳥とりつくしまもあらいそやかゝる浮目におちなれ

ば出づる旭ともろともにきえてこひしき父君につもる話もせんものと朝な夕なに思ひけりいまとなりては我れながらいとおもはゆしなにとてかく淺心だせしよなわざのならざる花つぼみ父君のあとをしたひてゆくにせよ父はいかりにふれ給ひ面をそむけて言の葉まじへ給ふまじ露の命と知るからはたゞつかの間もいそしみて名をとこしへにのこしおき茜のさすをまちのぞまなん

白玉となりて旭をまちのぞみ　こひしき父にまみえまほしき

談叢

日の出岩

勝間禪夢

むかし富士山の麓に作兵衞といつて一人の壯健な爺さんが住で居た、此爺さんは小兒も無ければ女房も無い、それでお負に貧乏で、若い時分から種々苦勞を積だ故で、未だ漸と五拾の歳を越た許だが、頭の毛は眞白で額には大皺小皺が幾條も寄て居る、だから幾何稼いだつて樂みも張合も無さゝうに思へるが、此爺さんは仲々左樣でない。

毎朝野原から帚草を澤山取て來て、せッせと草掃帚を拵え、そして其を脊負子に乘せて里の市へ賣に行のが作兵衞の商賣であるが、一日も怠つた事は無い。

さうかと言て金が欲しいといふ欲心も無ければ村の人に譽めて貰はうといふ名譽心も無い、が、唯だ自分を賴にして居る身內の爲には骨も惜まないで働く、若し此の作兵衞に一人も身內が無かつたら、年百年中稗飯許喰て居て、そして偶に近所の人から盃を一杯位御馳走して貰ふので、喜で暮して居たであらう、が、まさかさうも出來無いのは、白金にも黃金にも增さる一人の可愛いお淸といふ姪娘があるからだ。

此の姪娘といふは作兵衛の妹が里の酒屋へ嫁いて生たゞ子供で、それを作兵衛が自分の養女に貰受け大事にして育てゝ居る、その丹精で漸々に成長り、花ならば明日か一後日かといふ蕾の年頃に成つたが、緻標といひ性質といひ申分の無い善い子であるから、村の人は皆な此の娘を擧めて、作兵衛の幸福を羨しがつて居る、それから又此村に長治と言つて日雇取をして稼いで居る若者があるが、正直で極く〳〵堅い勉強者だといふので、大層作兵衛の氣に入つて姪娘の婿に貰ふことに相談を極めた、だが此の長治は作兵衛の樣に、自分の五體より外の物は浮世の上に何も持て居無いといふ程の素漢貧だから、婚禮の仕度の出來るまでは互に稼ぎ合つて、金の貯つた上で立派に結婚をしやうと言て、唯だ後の約束を固めて置くために眞鍮の指環丈を假に取替して置いた。

『眞鍮の指環たあなさけねえだ、他家の娘は見や、わしんとこの清女より緻標も何も餘程悪りいだが、皆な金の指環を箝めたり絹の衣物を着たりしちよるだ、どうか清女にもさういふものを買て呉れべいと思ふだが、わしがはあ貧乏だんて仕方が無えよ、だが、こんねに正直に稼いたらあにもはあ買えんちふこたあ有るめいだ。』

と獨言を言ながら或日の朝野原へ箒取に出ると丁度彼方からも長治が空馬を曳きながら、高い山から谷底見ればェ瓜や茄子の花盛りナアエドウ〳〵と野原歌を面白さうに謠つて來た。

『長治どん、滅相早えのう。』

『や、父さん、お早うがあす。』

『お主や、本統にもう仕事に行のかい。』

『さうよ、父さん、うらあ今日から稻苅だ、旦那んとこなあ奥手だんて苅取も遲えだよ。』

『ええ、遲えもんだの、今日は十月の五日だちふに

………かう、長治どん、お主やわしい今何を考へてるか當て丶見な。』

『父さんも考へることがあるかのう、うらも此中は種〱々はお考へちよること許わりやして、御清はんは此頃まあ何うして居るべいなんどゝ管らねえことを思て居るだよ、そしてうらあ易者で無いだから人の心あ塵程も解りやしねえが、父さんのは何んなこんで御在やすね。』

『わしのかい、わしの考へてるは斯様だよ、此の野原をこんねに草だらけに茫々としたまゝで捨てとくはえれえ惜しいものだて、わし一つ奮發に開墾して見べいと思ふだ、そして金さあうんと儲けてお清に衣服や指環を買つて呉れて、祝言の仕度のう拵えて、早くお主とお清とに三々九度をさせて見ていなんかとわしやはあそんな事を苦勞にして居ただ。』

この話を聞いて若者の長治はにや〱嬉さうに笑つて居たが、開墾と聞いて急に眉を皺めかう言つた。

『父さん、そりやあ危ねえ、危ねえこんだ、開墾ちふ奴は思つたより面倒嗅いもんで、堅い土を掘ちくつたり、根つこを引つこ抜いたり、岩あ打つ砕いたりするにやああえれえ力の入るものだからのう、年寄にや到底はあ出來やしねえだ、父さんそりやあ止したが善かんべいよ。』

『お主やわしの考へを笑ふだが、あにも出來ねえこたあ無かんべい、帶草を引こ抜より少度あ六ヶ敷いだが、わしも若い時から野原で鍛へた腕を持つてるだ、今時の若衆にも矢鱈あ負けねえ積りよ、何うしてもわしや此の原を開墾のう爲てお清に祝言の支度を拵えて遣りてえだ、………ちやあ、長治どん左様な。』

『父さん、左様な』

其の翌日一番雞が鳴いた許で未だ夜も明け切らぬ内から、作兵衛は鶴嘴鍬を肩に掛け、此の野原の隅で日の

出岩と呼ぶ塲所へ急々開墾しに出掛けた、そこには大きい岩だの丸い石だのが澤山轉がつて居てそして朝の景色が頗る善いといふので斯樣いふ名前を付けた、今作兵衛は鶴嘴鋤を一掘地面に打入れようとすると、何うしたものか急に眞青な顔に成つて日の出岩の方を眺めた。

するど一番大きい岩の間から大層奇麗な美しい乙女が一人顯はれて、その石の上に乘り作兵衛の方を頻に眺めて居る、だから作兵衛も恐く成て、此の乙女は決して人間では無い、妖怪だらうと思つて居た。

此の妖怪は普通のおばけと違い、躰の優さしい顔のうつくしい乙女で、白い綸子の衣服を着て、紫の裳を腰に纒ひ、水色の勾玉や管玉を領に掛け、まばゆい樣な緋の袴を佩いて、頭の毛は御下髮にして後に垂らし、右の手に檜扇を握り、左の手に青葉の着いたまゝの松の小枝を杖に衝いて居る、そして傍に咲いて居る野菊の花や蘭の花は、まるで乙女の裾を繍箔した樣に見える、それから岩の周圍に生え繁つて居る小笹の葉や蒲の葉は皆な前に屈んで乙女に御辭儀して居る樣だ、そして又乙女の頭には御光が晃々とさして居る、この乙女は妖怪では無い、山の神であつた。

『作兵衛や、お前は大膽の人だね、私の領地をまあ默つて盜みに來て、本統に惡い人だよ、少もお前等に此原を遣ることは出來無いから、さあどつとゝ歸つて御呉れ。』と言ッて山の神は恐い目付を光らしながら、鋭い聲を立てゝ作兵衛を叱りました、作兵衛は震へながら、

『誠にはお濟みません。神樣、だがおぞい心持は毫頭も御坐りやしねえから、何卒許して御呉んなさい、わしや貧乏な水呑百姓で難澁するもんでがすから、少許貴神樣の廣い御領地を惠んで戴きに參つたでげす、わしや決して野原を荒しは致しやせん。何卒さうして戴

きたう御坐いやす。』と言つた。
『お前は此原を貰ッて一躰何うする積りだえ。』
『へい開墾して穀物を植ゑべいと思ひやす。』
『作兵衛や、お前は開墾すると御言ひかい、あの地面を掘りかへして草や木を拔いたり石を除けたりすることだらうが、そりや不可いね、お前が態々そんな事を爲ないでも、此の野原に自然にもとから奇麗に成て居て可愛らしいぢや無いか、そんな無暗のことをするから私やお前を大膽といふのだよ……まあ春に成つて此の原を眺て御覧、どうなに麗しいか知れ無い、空の藍色は長閑かに霞んで、青い若芽がちら／＼と樹々の枝から生える鹽梅のやさしさ、そして水仙の白い花は沼の中に咲いて、美事の匂を放ち、雀は藪で面白さうに春の様子を語り合ひ、鶯は森で嬉しさうに春の景色を謡ひ合ひ、それから種々のも此原に遊に來るではないか。』と山の神が言つた。
『實に鳥ちふ奴は善いもので御坐います、三度に高い聲を響かす鶉や、弱ッた調子で鳴き立ながら空に飛び揚る雲雀なぞはわしもはあ大好でがす、だがね、こんねな鳥は皆な穀物の植はりやしてる田畝に許巣を喰ふもんで、荒れた野原にや一匹も居ないもんでがすよ。』と作兵衛は答へた。
『では、夏に成つて野原一面が晃々した太陽の光を浴びて、種々の草の繁から善い香氣が涼風に吹き送られて來る時私は雁來紅の紫色とそれから百合に羊歯の花が一番好だが、お前が開墾して仕舞ふと最早見られ無くなるが困るぢやないか。』と山の神の第二の問に作兵衞は、
「わしが開墾して田地や畑を拵えますと、そんねな物は見られなく成つても其の代りに實の入つた麥の穗が首を垂れて居る畑を見たり、それから少許經つて、青々とした稻の葉に小波を打つて居る田地を眺めたりす

ることが出來やすが、ええ氣持の善いもんでがす。』と答いた。

『秋になるとお前も知つてる通り獵師が私の領地に這入て來て、獵犬を吠えさせたり飛ばせたりして、獸を苛目るだらう、私はその獵師が惡くつてそしてその獸を不便に思ふよ、だから此の日の出岩に追掛けられた鹿が逃げて來ることが有れば、私は獵師に見付られない樣に密々安心の地へ連れてつてやるのさ、だがお前はまあ如何して呉れるえ』と言ふ第三の問に作兵衛はかう答へた。

『へい、わしも性分で獸を不便がりやす、此間もそんねな目に逢はされて居る南京兎を一匹助けて遣つたでけすよ、若し此の原が開けやして田畝が出來やした日にや、あにもはあ心配することたあ御坐りやしない、鹿にも兎にも隱逃所が自然と澤山出來るでげすもの、幾何獵師や獵犬が來ても大丈夫のこんです。』

『だがね、お前が此原の薄や茅や又種々ある雜草を一本殘らず苅取つて仕舞つたら、私は如何して寒い冬の長い晩に火を拵えることが出來やう、私は刻い此風に身を切られそして冷たい雪に埋められて死んぢまは無けりやならないが、お前も矢張私を殺す氣かい。』といふ第四の問に答へて作兵衛は、

『山の神樣、そりやあ斯樣なすつたら善かるべい、寒く成つたらわしの家さ御出なさつて圍爐裏にでも巨燵にでも存分御あたりなさるだ、わしも直時に新しい家を此の近所に建てべいと思ふで、其時や毎日のやうに御出なさつて下さいやし、娘のお清にも吩附て置いて貴神樣の御相手を致させやしやうで……何卒はあ御慈悲で此原の隅を少許わしに御與んなさる、そしてお清が小兒を生みやしたら、その子の守神に成てやつて下さいやし、御願ですから……。』と手を合せて言つた。

そこで山の神は急に機嫌を直し、顔の色も大層以前より優しく成つて、

『あゝ、彼の娘かい、私は善く知つてるよ、大層色の白い縹緻の美しい子だね、そして氣立の善い………それから私はお前が昨日の朝此原で話をして居たあの若い男を婿に貰はうといふことも聞いてるよ、二人共揃つて善い夫婦だね、そしてお前も正直で素朴な男だ、自分の爲にや塵一本も慾を出さないで娘の事許朝晩苦勞にして、本統に感心な爺さんだよ、お前の未來は必度芽出度だらう………さあ遠慮なく鶴嘴をお取り、どんどゝ地面を御掘り、私はお前が要るだけ此の領地を分けてやります、だが此事を聞いて村の者が皆なお前の眞似をすると、私は終には居る所が無くなつちまうから、他言は無用、私はお前の幸福を思つてお前に許遣るのだから、決して誰にもこの事を漏らしては不可いよ。』と言つてにこ／＼と笑ひながら檜扇に顔を隱すかと思ふ間に早や躰も隱れて見えなく成て仕舞つた。それからといふものは作兵衛毎朝日の出岩へ行つて、土を掘り返へしたり、堅い石を割つたり、蔓つて居る木の根を引抜いたり、そして木屑や草屑を一纒に集めて、それに火を燃し付たり等して、一生懸命に稼いだから、十月の末には一町歩程の地面を大概奇麗な畑に作て仕舞つた、これは自分の腕で鶴嘴を持つた許で、仕上た樣だが、他から暗に力を添えて下さつた山の神が有つたから、これ程廣い荒野もまたゝく間に開墾することが出來たのである。

そこで先づ畑開に大麥を蒔いて見たが、霜も善い鹽梅に被り、肥料も美事に利いて、翌年の四月に作兵衛が姪娘のお清を連れて視巡りに來た時は、緑の稈が房々とした重い穂を戴いて、風にぐら／＼動くやうになつた、その狀態は丁度作兵衛の骨折に御禮でもいふ樣な風であつた。

間も無く作兵衛が此の畠の麥を不殘苅つて仕舞つた時は大層な收穫で澤山に利益を取つた、婿の長治さんが此の仕事を驚いて、えれえ父さんの腕だと譽めたから、作兵衛は態と笑つて、

『わしやあこんねに嬉しいことたあ、今日迄ちつとも無いこんだよ、まあとう／＼願求が協つたたから、お清に金の指環や絹の衣服なぞを取揃えて買つて與れべいと思ふだ』と言つた、するとお清はかう言つた。

『阿父さん、そりや御止なはい、お前は昨年から老躰をえらく疲らしなはつたに、何もそんな苦勞をすることたあ御坐りましない、それより少度體でも休めなはろ、指環なんか買ひなはるより穀鋤と馬ども買つた方が阿父あんの仕事が樂に成つて餘程善いよ、本統に阿父あんさう爲なはろ。』

さういふ譯で婚禮の支度品は廢めとなり、穀鋤に馬とを買つて野原仕事を勉強したから、その年の秋が再び來た節は又々二町歩程の原を畑にして仕舞ひ、それから翌年の夏には丁度二倍の收穫が有つた、だがお清は未だ指環と衣服を買ふことを承知しない。

『阿父あん、今度は牛を二匹御買ひなはい、野原仕事に調法のもんだから、………』と言つた位で、又その次の年も、

『そんな物は後でも善いんて、家を新規に御建てなはろ。』と言つて婚禮の日の來るまでもとう／＼買はせなかつた。

その後間もなく芽出度い日は來た、其の時

『私は長治はんと幾末何時までも色の褪めない松の心を深く取替はしましたから、金の指環や絹の衣服は無くつても構ひましない、何と長治はんさうぢや御坐りましないかね。』と花嫁が言つたら、

『本統にうらもさう思ふだ、こんねに畠を持つてる家さ婿に來やして、お清はん見てえな優さしい女と夫婦

になるのは、何ちふ嬉しいこんだらう。』と花婿が答へた、それから作兵衛も喜んで、

『お前等二人は白髪の頭へつん生えるまで、仲善く健全で稼いで呉んなさろ、何しろ結構な日だ、芽出度い、芽出度い。』

その後作兵衛の眞似をして此原を開墾する者が我も我もと續々顯はれたが、此の爺さんの様に思はしくは一人も成効し無かつた、だが誰にても作兵衛のやうな淡泊した心で、一番雞が鳴き出す時彼の日の出岩に行つたなら、白綸子の衣服を着て緋の袴を佩いた山の神を拜むことが出來やう。　（完）

此の一篇は佛文の小兒話を英譯より重譯したるものなり

薔薇姫

えい子

むかし／＼或處に、王様と女王様とが御住になつていらつしやいましたが、其御方にはまだ御一人の御子様も御生れになりませんでした。其れですから、何一ッ御不自由のない一天萬乘の君様ですけれとも、此の事の協はないのを御嘆になりまして、たとひ幾萬の御金を擲てなりとも、又は綺綾や錦を山ほど積でなりとも、どうか此の願を協へたいと思召ました。

鐵も溶けそうな暑い或夏のころ女王様には避暑のため、海邊近い離宮へ行啓になりまして、毎朝海水へ御入浴になりましたが、其間も常住此事を思ひつゝけておゐでになりました。スルト或る朝女王様がいつものやうに御入浴になつておゐでの處へ、何處からか一匹の蛭が水の面に泳ぎ出まして女王様に向ひ、御前様が年來御願の事は必ず達せられ、一二年の中には姫宮が

御誕生になりましやうといひまして、消えたやうに、又水の中へくゞッてしまいました。

まことに此の蛙の申しました通り、其から二年たッて可愛らしい姫樣が御誕生になりまして早速いばら姫と御命名遊ばされました。女王樣は一方ならぬ御悦てありましたが、別けて王樣は御氣が違つたかと思はれる程御喜になつて、朝から晩まで御側にばかりお置になつて、其御寵愛あそばす事は普通大抵の事ではありませんてした。勿論是は御尤の事であります。第一年來の御願が協ひ、第二には御姿色のよいことは、書に書いた樣であつたからです。そうして四五週間も立ちました後、王樣は御家來に御吩咐遊ばして、盛なお祝をなさいましたが、其時には多くの宮樣を初め、大臣參議朝野の紳士までも皆御招になりましたが、また其上に別段御姫樣の御爲にならふと思ふ此の國で有名な巫女も御招きになりました。此等の婦人は此國中に十三人ありましたが、此人々に御用立になる膳椀は、黄金製のでなければならなかつたのですが、生憎十二人前しかありませんでしたから、一人は御招きになることが出來ませんでした。此の御祝宴は實に形容の言葉もないほど賑かに、高大に、擧行せられました。此の御祝宴の終りました後で、巫女達は先づ第一には親切な心、第二には美しい御容貌、第三には御金持と云ふやうな、其他地球上全世界にありとあらゆる善事や快事を姫宮樣か皆備になるやうにと禱りました。扨て十二番目の順に廻りました時、不意に戶を押志破つて入り來た人がありましたが、其人は凄い恐しい意氣込でありましたから、皆驚いて何者であらふと見ますと、之は御招にもれた一人の巫女が押し入りて來たので、其者は其處に居幷んで居た人々に挨拶もせず、聲高々に呪つて申志ますに、姫君は十五の御誕生日に御自身で紡績車に觸れ御怪我をなされて、御かくれになります

といつたきり直ぐ其身を隱して志まいました。人々はこれを聽き、顏色もなくなるばかりに驚きましたが、唯十二番目の巫女はまだ何も禱りませんでしたから、靜かに御前へ進み出で、其神力を以て此の怖ろしい咒を取り除ぞかうといたしました。志かし出來ませんでしたから、せめては之を少しなりとも輕ろくしたいといふ心で、禱て姫宮樣は御かくれ遊ばさぬかはり、百年間引續て御睡になりますといひました。

父君と母君は、御獨りの御愛子にかゝる大事が起つたと御聞きになつてからは、氣も狂ふばかりに御心配あそばして、どうしてなりとも此の災難を救つてやりたいと思し召して、直樣國内へ嚴い御告示をなさいまして、紡績車といふ車は、一も殘さずに燒き棄てるやうにと御命令になりました。

小兒の成長するのは誠に早いもので、半年が一年、一年が三年と立ちます中に、姫樣は御壯健で御成長になりまして、巫女達が願望いたしました事は、漸々に成就しまして、親切な御心は、御美貌も、御柔和も、御愛嬌も、御備へになりましたゆゑ、見る人逢ふ人貴きも賤きも皆此の姫宮樣を御慕ひ申上げ、野外などへ御運動に御出になる時は、雲なす人の山を築きまし程でした。

月日は追々と過ぎ去りまして、丁度十五の御誕生が間近になりました。或日のこと王樣と女王樣は何地へか御出かけになりまして、一二日御逗留になりましたから、姫宮樣はお獨で御城に御殘になつて居らつしやいました。兼々一度この御城の中に、幾箇となくある建物を、すつかりと御覽になりたいと思つていらつしやいました折から、今日は幸な時と唯だ御獨りで、御覽になりに御出かけになりました。勿論幾百年と經つた御城で、代々の王樣と女王樣より他には誰も御通しにならない處や、種々の御寶物などがありましたが、其

等を隅なく御覽になり、いと興がつて此度は一番裏手に屹と立つてゐる、高い塔に御昇りになりました。其昇段は扇なりに廻る階段で昇れば昇るほど狹くなり、おもしろいといふよりは、薄氣味の惡い所ですが、姫宮樣は奮發して終に昇り切つて、戸のある處まで御出になりました。すると其戸にはサモ古るぶるしいさびた鍵が懸て居ました。姫宮樣は面白半分に、御手づから此を御取りになり、色々とねじッて御覽になるうちに、戸はパッとあきました。ソコデ姫宮樣は薄氣味惡そうに、御這入になると年老いた婆さんが、壁の隅で頻りに糸車で糸を紡で居りました。姫樣は之を御覽になり何おやしみも、臆しもなさらず。づか〳〵と御近寄になつて、お婆さんお前は今何をして居るのと御問ひになり、又た其くる〳〵面白そうにまわるものは何か、なと〻御尋ねなされながら、御手を以てこの車を御試みになりましたが、中々容易くまわりません。さうかうする間に、兼々の豫言が當りまして、御指を御痛めになりました。そうするとぢき其側にあつた蒲團の上へ御横になつてスヤ〳〵と御ねむりつきなさいました。此の姫宮樣の御ねむりになつたやうに、此の御ねむりはザッと御城中へ隅なくひろがり、王樣と女王樣は御歸りになつて、御居室へ御這入になるや、すぐに御ねむりになり、又侍從や、女官、それから御廐の馬、御手飼の鳥、或は壁の上や御城中を、あちらこちらへとびまわつて居りました蠅までもねむり出しました。其中でも最おかしいのは、御火鉢の火までがねむつたこと〻、御台所の方で沸騰つてブッ〳〵音立て〻居りました色々の御馳走の靜かになり、御料理方が小僧が言付をきかぬからといつて、髮の毛をひッつかんで居りましたのが、其儘ねッてしまいましたとです。又外では、先程までザウ〳〵と吹いてゐた心地よい松風の音までがねむつてしまい、木の葉も其動をやめて

ヒッソリとしてしまいました。扨て此御城の周圍は隙間もなく、刺薔薇の生墻てゆはれてありましたが、年々歲々に成長いたしまして、或所なぞは物見のやうな高いものさへも、見えぬ程に成長して居りました。ですがさすがは王樣の御城だけに、御手入かよく屆きますから、誠に見かけもよくいかにも御居城の生墻だといふことは一目でわかる程で、此方からながめますと全く其城は此薔薇のためにかくれて、どんな壯嚴な御城が其中にはあることかと思はれます。

其後月日は矢の樣に過きて、はや幾十年もたちました。其間此の國人等は色々な噂をいたして居りました。今まで方々から時々宮樣が御出になつて、この薔薇の生墻をわけて、城中へ御這入なさらうとなさいましたが、ばらの刺は丁度人の手の樣な工合に巧に働いて防ぎましたから、遂ぞ今まで唯御一人として目的を御達しになつた方はございませんでした。唯だひどく御痛をおぼへてよわつて、御歸りになる方ばかりでありました。

其から又た永の年月が經ちました。時に外の宮樣が此の御國へ御出になつて、其の町の入口に御休なさいましたが、丁度居合せた一人の爺さんは、お父さんから子供の時にきいたと申まして、此の御城の生墻の物語を御話し申上ました。其語に此の生墻の後には立派な御城があつて、其處にはめつらしくうるはしい姫宮樣がねむつて御出なすつて、幾十年と經つて居るが、未た誰一人として御目にかゝつたものはなく、此處へ這入るや否や、皆死くなつてしまうといふことを、サモふしぎさうにまじめに御話し申上げましたのを、此宮樣は御聽きなすつて、御心の中に大層に御勇みになり、すぐと御決心なされて、自分は是非に此の内へ這入ッて見よふと思はれました。この御樣子を見貫た爺さんは、しきりと御諫申ましたが、少しも御聞入なく、是

非とも此中を見よふと仰せられました。今は爺さんも此の御勇氣に壓されて、御城の入口まで御案内いたしました。

丁度今日は百年になつた其最終日でありまして薔薇姫は御目醒にならふとしたときでありました。宮樣はこの墻へ御近寄になり、刺の中をわけて御還入になりますと、恐しいと思つた刺は瞬間の中に、見事な眞白な花と變り、ばらの墻はチャントわかれて道が其間に出來ました。そうして宮樣が御通りになる先々は、皆そのやうでありましたが、御通過になつた處は、復皆元の刺に變てしまいました。まづ御城へ御還入になると、御庭にある厩の馬はグゥ〳〵ねむり、犬もねむり、又鴿などは頭を翼の間に入れて心地よく睡むつて居ります。又進んで御城内へ御還入になつて、部屋々々を御覽になると、侍從達も、女官も、小姓も、料理人も、蠅までも、人といふ人、物といふ物、此の御城内より御城のまわり、全て御城に屬し居るものは、何一つとしてねしづまつてゐない物はなく、夜でいへは丑の刻ともいふべき有樣でありました。宮樣はダン〳〵御進みになつて、奥へ御入りになると、玉座には王樣と女王樣が御睡りになつて居るのを御覽になり、又其れより奥へ御還入になりまして、御自分の呼吸を一もきこえるほど靜まッた御部屋を幾個となく御通りになつて、とうとふするい物見の處まで御昇りになッて、其小さい戸を御開きになりますと、一人の娘が睡つて居るのを御覽になりました。宮樣は此の無邪氣にねむつていらつしやる御樣子の、いかにも罪なく其御顏といひ、其御姿といひ、何一ッ點の打所のない御美しきには感し入つて、他目もふらず之に見とれて御出でなさると、とげばらの宮は丁度御目醒になり、直くと顏を彼方にそむけられましたが、此度は滿面に笑み溢れた御顏を此方へ御向なされ、一目見て御挨拶なされまし

たけれども、姫宮は長らくの間、御眠りになつたことですから、いと不思議そうに、あたりを見まわされました。併し又たすぐと氣づかれたやうに起き上り、其處に御ゐでになる宮樣と御一處に下へ御降りになりますと、王樣と女王樣は先づ御目醒になり、次に侍從、女官、小性達も驚いた顔をして目をさまし互に見合ひ、御廐の馬は起き上りて威勢よく嘶き、犬は尾を振りながら、鳩は頭を翼の中より出しながら、巣からはいいで直樣とび出し、壁に止まつて居た蠅はブン〱と鳴きながら徊ひ初め、火は食物を煮る爲めに赤く燃え、煮物は又以前の如くブツ〱と煮へ初め、料理人は小僧の毛を引きつけながら叱りつけ、御女中は又急しく鳥の羽をむしりかけまして、この御城内は復た舊の樣に働き初めて、百年間睡つた勢で威勢づき、人も物も何一つ變つたとはありませんでした。

日增に此城内は急しくなり、又此國人も皆吉日を指折り數へて居りますのは、御二人の若き宮樣の御結婚のある爲めてす。其二方とは皆樣も既に御わかりでございましやうが、御一方は彼のとげばら姫で、他の御一方は御城の奥の院まで、恐れずに御這りになつた最も御勇ましい御氣性の宮樣であります。偖て其待ちた日となりました時には、御儀式は最も嚴粛に、最も盛大に擧行せられまして、其より御二方とも長い御壽命を御保ちなされ、御仕合であつたそうであります

(完)

此譚は獨乙國にて最も普通に行はるゝお伽物語なり

ブリタニイ婚禮の奇風

佛國ブリタニイの地に行はるゝ婚禮の風習を聞くに、頗る奇異なるものあり、そは結婚すべく定まりたる新婦が祭日に着飾る所の下着には、必ず白色及黄色の絲を以てその縁を縫ひ取りたる數個の細き線あり、即ち此の線は男親がその娘に賦與する財貨の多少を示す記號となるものにて、例せば白色の一線は毎年

銀貨百フランクを與ふる事を示し、黄色の一線は毎年金貨一千フランクを與ふることを示す等なり、所變れば品亦かはりて面白き風習もあるものかな。

小説

野游び

花村

雨は霽れるし、風は罷むし、暖くはなるし、もう春草の花も咲揃つたであらう、こんな好天氣に二疊半に閉籠て居るのも面白くないから、私は晝飯を濟して遥くすみチャンの手を曳いて、久しく訪れなかつた野邊に出て見ました。

咲いて居ました。菜種の花も咲いていました、蓮華草の花も咲ていました。菫菜の花、蒲英公の花、其他名もしれない種々な可愛らしい花がいづれ劣らぬ色に咲き誇つて居ました。それに今日はまあ何といふ長閑な日で御坐いませう。晴れた空には一片の雲も見えないが、霞が薄絹を張りつめた樣に一面に棚引き渡つて。其を透して春の日はどんよりと眠たさうに野邊の錦を照して居ます。

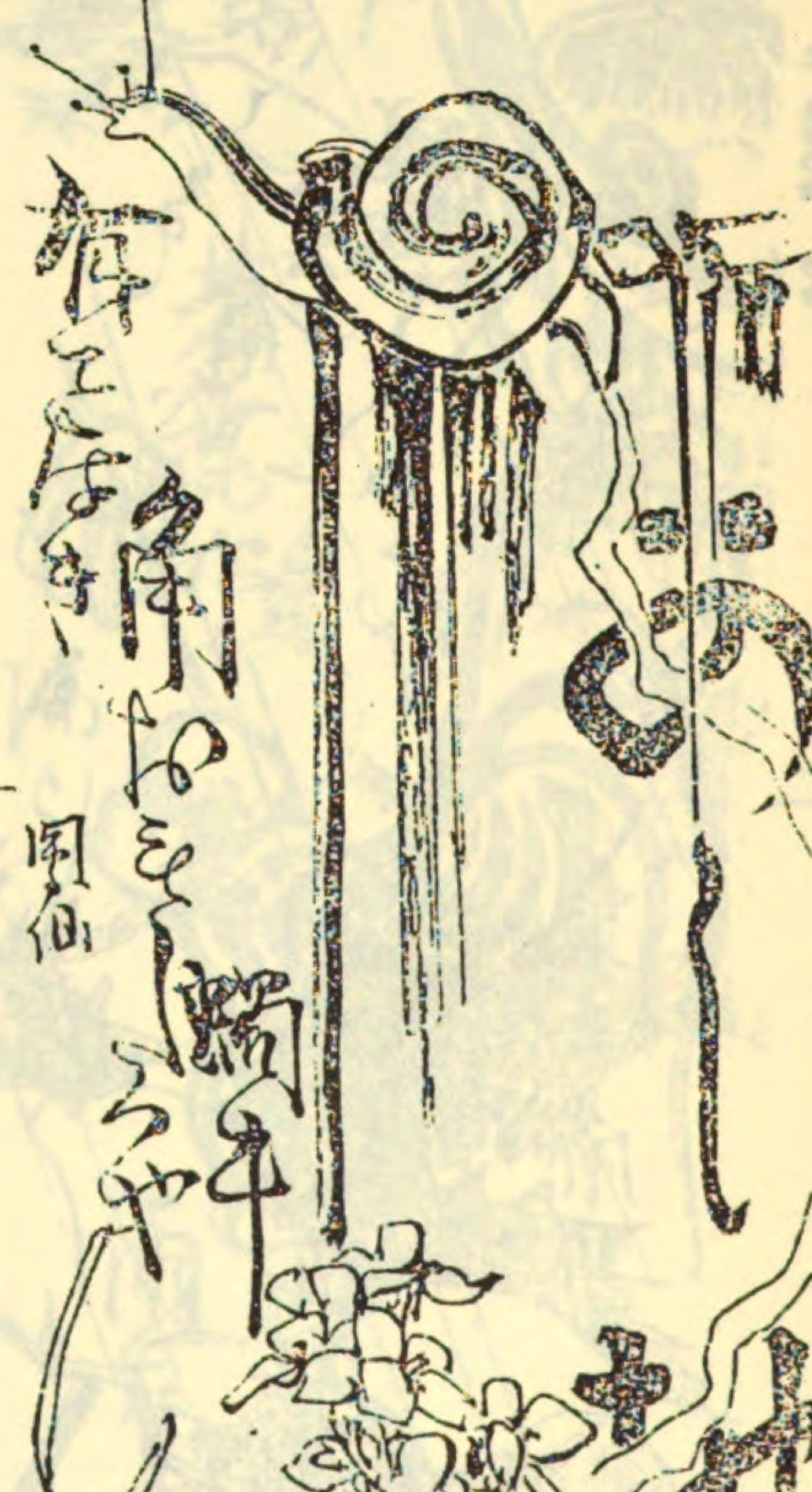
サアすみチャンは大雀躍です。赤い花や、紫の花や、黄色の花の中を、胡蝶の樣に、彼方に飛んだり、此方に跳たりです。それが私にはどんなに邪氣なく、どんなに可愛らしく、どんなに美しく見えましたらう。

私はこの美しい景色に打れたせいか、長閑なる日影に浴したせいか、もう渾身が鎔けんばかりになつたので、一團咲揃つている蓮華草の上にコロリと寢轉んで、すみチャンが餘念なく蝶を追つて居るのを見ていました。

私は美しい優しい戀しい人の懐に抱かれて居る樣な感がして、何ともいへない好い心地になつて、氣が遠くなつて、果ては憂世の事も、すみちやんが傍に居ると

も、何もかも悉皆忘れて仕舞た。「蝶よ〳〵菜の葉にとまれ」と歌ふ聲が千里も萬里も遠くからするかの樣に聞えました。

其間私の心には故郷の景色や、小供であつた昔の事が、續々と浮んで來ます。その一二と言て見ませうならば、ある日朋輩と蕨採りの歸るさ、路傍の苗代田に溢るゝはかり蓮華の花が咲いているので――これは田の肥料にとてわざ〳〵蒔いたのださうで小供の事とてそれとは知らないから――それを見ると、もう犬の子を見た樣にコロ〳〵と飛びこんで、さお角力といふ騷ぎです。堪りません。かくまで美事に



咲いて居た蓮華草は時の間に取次筋斗。この所を折悪しく村長の源兵衛殿に見付けられ、大きな目玉を頂戴した事や。戰遊をするとき、銀紙を張つた竹の刀で敵の首でも打落す樣な氣で、菜種の花をスパリ〳〵と拂つて居るところを、突然に後から怒鳴つけられたので、ギヨツとして振顧くと平助老爺であつた事や。姉樣に連れられて草つみに行くとき、一對の蝶が、よれつもつれつひら〳〵と飛んで來たので、何の氣もなしに携ていた杖を打振つたら、それが觸れて一足の蝶は地上に落ちたが、起も得あがらず、たゞ破れたる翼を振はせて悶へて居るのを見て、姉樣

は可愛そうにと、美しい眼に涙を浮べなすつた。それから以來は決して蝶を打たなかつた事、まあこんな事、などが繪を見る樣に浮んで來る。あゝ故郷には昔の樣に菜種の花も咲き、蓮華の花も咲いて居るであらう、村長殿や、平助老爺は壯健て居るとか知らん。姉樣はもうお嫁に行かれたとやら、今に可愛い赤ン坊が出來て葡萄の樣な房々とした乳房を啣ませて、あの美しい聲で兒守歌を歌はるゝ時か來るてあらふ、それにしても今一度昔しの小供に復りたいなあ。



この時兄さん兄さんといふ聲かするので、初めて我に復ると、すみチャンか連りに手招をして呼んで居る。私はムックリと起ちあかつて走り寄らうとすると、愛らし顔を顰めてソットといふ。言ふまゝにソット忍ひ足に近よつて、すみチャンが指さす方を見れは。御覧なさいまあ可愛じやありませんか。黄色の蝶々が菫菜の花にすがりついて眠てさ、何か夢でも見ているのか翼を左右にのばしはするが敢て逃け樣ともしません。すみチャンは愛らしい手をさしのべてチョッと押へました、袂をくゞつて蝶は逃げました。すみチャンは押へた菫菜を摘みとつて、兄さんこれは何と云ふ花なのと尋ねますから、それはね、菫菜とい

ふ花だよまるですみチャンの名の樣だねと云ひます
と、すみチャンは嬉し氣につこり笑んで、妾この花
大の好きと、一寸接吻して、兄さんこれを頭に挿して
頂戴なといふ、挿して遣つて、アヽ綺麗だ隣家の露チ
ャンの樣だといへば、すみチャンは無邪氣顏をして、兄さんは隣家の露チャンと妾は孰がお好きといふ、私は笑ひながら兄さんは隣家の露チャンは嫌い、誰れよりもかれよりもすみチャンが一番好
きと云へば、すみチャンは何んと思つたか、兄さんこ
の花上げませうかと持つて居た沸英公の花を差し出し
ました。あい頂戴よ、と受取り難有よといつて捨てる



わけにはゆかないから、そつとその花に接吻するとも
一つ進げよね、も一ツ、も一ツと、云つて摘んで遣る
んですよ。だもんですから暫時の間にもう手に餘る程
になりました、そこでこれを花束に作つてお母樣への
苞苴にするといたしました。

折から先に取り遁した蝶がまたひら〳〵と飛んで來たので、あれ蝶がと叫んで、すみチャンは後を追はんとする、驚きましたね、足元から突然にパタ〳〵と起つ
たんですよ、雲雀が。すみチャンは愕然して私にしが
みつく、雲雀はリユラ〳〵と樂しげに囀りながら空高
く舞のぼる。あれ〳〵と見ている中に、愈々高く舞ひ

あがつて聲ばかりは手に取る樣に聞えるが、姿は見えぬ樣になつて仕まつた。

さてすみチャンが歌ふやうに私も歌ひ、すみチャンが蝶を追ふ樣に私も蝶を追ひつゝ野末に行きますと一つの小川が流れて居ます、その川に莠草の花が流れて來る、流れて行く、また、其後から流れて來る、面白から岸に立つてながめて居ますと、何時の間にか、何處よりか、一疋の蝶が飛んで來て、其花にチョイと止まらうとしたが、止まり損なつてまたチョイとたつた、が如何しても思ひきれないと見えて幾度か同じ事を試みては、失敗し、失敗しては試みて



とう／＼花の行方を逐ふて往てしまひました。

私はなほ水の面をながめていますと、すみチャンは私の袖を引いて、あれ水が何とか言つてよ、と云ひかけたが、ぢつと小首を傾むけて、あれねチョロ／＼／＼あれは兄さん何んと言つて居るの、と問はれて少々答に窮したが、あれはね赤ン坊が寐ねするときに、御母樣が歌ひなさるやうにね寐んねんよ、おころりよと、云つているのと出任せをいふと、あちそうと、すみちやんは私の顔を仰でニッと打笑んで、それだからあしこにお老爺さんが寐ねして居るのかしら、見れば成程向ひの岸に一人の老翁が作仕事に

疲れたのか、鍬も、手も、足も、同じ樣に投り出して、他愛もなく寢ている、頭の上に雲雀が囀つて居るのも、頭の下に水が歌つているのも、鼻のあたりに蟻がはつて居るのも、私等がこうして見ているのも知らず、一切無我夢中になつて寢て居るが、その寢顏にいかにも罪なく木訥な匯が見える定めし佛の樣なお老爺さんであらう、その證據は御覽なさい、半ば禿げかゝつた頭から光明がさしていますもの、すみチャンはまるで赤ン坊の樣ねと耳語やく、私は其顏の何處となく平助老爺に似て居ると思へば懐かしくもなる、もしすみチャンがもう歸らうねと促さなかつたら、



今暫く其顏をなかめて居たてあらふ、すみチャンが歸らうと促したのは空が曇つたからで、空が曇つたのはあまり天氣の好すぎたせいでしよう。

兎に角愚圖ついては居られませんから私はすみチャンを脊負て野中一すじ道を歸り行く、果して雨は降り出した、あのお老爺さんはまだあのまゝに何にも知らず寢ているのであらう?



て頗る簡潔なり定價六十五錢

近着紹介

健病のしるべ

赤坂區岩佐敬重譯
京橋區采女町熊澤發行

本書は獨逸醫博士ルーイス、クーチの著せしものにて消化の事、疾病除却の事、相親の事、蒸氣浴の事等を記述し譯文平明なり四六版四號活字四十ページ定價十五錢

家畜内科學第一卷

獸醫博士勝島仙之助著
神田鍛冶町朝香屋發行

其名の如く牛、馬、羊、犬、猫等の家畜の内科病即ち其原因、徵候、鑑別、療法、豫後等を學理的に講述し



世の中に恐しきもの

我國にては世の中に一番恐ろしきものは地震、雷、火事、親爺と俗に言へるが此頃米國にて同問題研究會々長ジー、スタンリー、ホールの報告に依れば恐ろしきもの六千四百五十六種の内多數人が最も恐ろしきは第一、雷鳴風雨第二、爬蟲（蚯蚓の如きもの）次は知らぬ人、暗黑、次は火事、死、家畜、病氣、幽靈、羽蟲、鼠、廿日鼠、盜賊、大風、恐しき夢、猫、犬、禁風、寂寞、溺死、鳥等なりと

家政

老主婦の物語(下婢の使ひ方)



左は多年家事に經驗ある或主婦か親しく語られし事の概畧を記るしたるものにして下婢の使ひ方につき日頃心を勞し給ふ姉妹方の參考に供す

妾一家の主婦となりて家政を執り始めてより或時は都に或時は地方に住居してはや二十二年となるも幸にして召使の者につきては困難を感ぜしこと至て少なく桂奄に依頼して雇入を探せしことは唯一度ありしのみなり妾が朋友妾に向ひて御身の家にては婢僕の交代少なく數年間續きて勤め居る者多し如何にせば斯くあらん何卒其秘訣を知らせ給へと云ひしこともありきされば妾が日頃實行なし居る二三の規則を擧げん

勿論二十二年の長き月日には下婢の交代も數度ありたり然れど其内五六名は他家へ縁付かんとして又二名は其家族か遠方へ移轉せしため暇を取りしにて其性質惡くて使ふに堪へず此方より暇を遣はせし者は二名のみなりき妾が此家へ來りし頃は下婢一名を使ひしのみなりしが今は二名の下婢と一名の下僕

あり
先づ給金の事より云はんに妾は常に先方より給金の催促をなすの必要なき樣定めし期に違はず且つ快よく拂ひ以て其勞力に酬ふるに吝ならざるの意を示す新らたに婢僕を雇ひ入る時は先づ其期限と給金を定めおきて先方より期限前に暇を取らば日割にて拂ふも若し此方の都合によりて不意に暇を出せば定めし期限迄の給金を拂ふ次に給金は何度に拂ふべきかを定め月拂ならば毎月末に拂ふなり又一の控帳を製し置きて仕拂の都度其金高及月日を記るし置きて以て間違の起らぬ樣にす家族一同避暑等に行くため一月或は二月家を空けて婢僕等を一時解雇するも歸宅の後引續き雇はんと思はゞ互に相談の上約束をなす主婦の方にて至當となす處と雇人の方にて公平と思ふ所と稍もすれば齟齬し易き者なれば最初に談判を精細になし後日に至りて誤解等の憂なからしむ殊に金錢上の事に至りては精密にして規則正しきを要すかの被雇人が雇主に對して不平を起すは多くは雇主が期日來るも給金を拂はず又其拂日の不規則なる等に原因するなりされば此弊は主婦たる人の聊かの注意によりて容易に免かるゝを得べし
妾は常に下婢等の仕事に目をくばり居て其出來宜しければそを賞むるなり妾は骨折りてなしたる事若し敬愛する兩親良人等の心に適ひて喜ばれし時ほど愉快なる時はなし去れば下婢等の成功善行等を賞め是を奬勵する者は妾の外には誰もなき事を常に念ひて料理の鹽梅の宜しき時硝子障子を透明に磨きし時板の間をきれいに拭ひ潔めし時或は其身を淸潔にして垢つかざる衣服を着たる時などは可成賞言を與へ喜ばしき貌を見すれば彼等は之を樂として益勉め勵むものなり凡そ他人より賛賞を受くるを喜ぶは世界一般の人情なり
下婢等が汚れたる衣服を着身躰を不潔にし毛髮を亂し置くなどの事は努め決して捨て置き難き事なれど去り

とて彼此六ヶ敷云い咎むるも功少なし却て清潔なる衣服を着けて時を見て「御前の着物はさつぱりとしてゐていゝこと」などゝ云ひ或は能く繕ひたる足袋を穿き居らば「御前は足袋に穴をあかして置かないから私は好きだよ」などゝ賞むる方効多きものなり

又妾は下婢等を決して厳しく叱責せず若し彼等に悪しき事あらば叱責せずして静かに教へ諭し其仕事の不出來なる時は斯くする方優れりとやさしく教へ遣るなり

又彼等過て瀬戸物器物等を破壊せし時荒々しき言もて叱れば彼等は己れの過失を他にして却て無理なる叱言を云われしと妾を恨みふくれ顔して用事を命するもろく／＼返事もせずふしようぶしようになすものなれば何の益もなし且つ下婢たりとて好んで故意に不注意なる者は稀にして瀬戸物の如きは如何に注意して取扱ふも破損し易きものなれば妾は下婢に物品を損せし時は隠し置かずして其旨を直ちに告げ詫をするを教へ置けどあまりに其過失を咎めぬなり

三名以下の下婢を使ふとき各に役を分ちて此は誰のかゝり彼は誰の受持ち等ときちんと定め置く時は彼等は己れの役目の外は一事だに爲すを好まずして互に譲り合ひ稍もすれば口論など引起すことあれば悪しかるべし素よりお三と中働きの役は異なれど妾は新らたに下婢を雇ふ時何事にもあれ前に爲しゝことのありとなしとに拘はらず妾が命ずることは皆爲すべしとの約束をさせ置くなり妾が隣家は大家にして小間使中働き子守洗濯婦飯炊婦等を召使ひけるが彼等は何れも己が役目と思ふ事の外は些細の事にても労を惜しみて爲さず或時中働きと小間使が二階の椽の掃除をなすは我役に非ず汝の務なりと互に口論を初め互に言ひはりて何れも手を下ざゞりければ主婦は止むを得ず毎朝自ら椽の掃除をなせり斯る不都合は規律正しき家庭にはあるべからざる事なれば主婦たる者はあまりに下婢の仕事に範

圍を置きすぎず又時に應じて何事にもあれ其命に快よく從ふ樣彼等を馴鍊すべきなり

家の用事は時によりて我は少なく或は多くありて一定の規則なきものなり故に病人あるか又は多人數の來客ありて平常の雇人のみにては手廻はり兼る時は臨時の補助者を要するは勿論のことなれど斯る時の外は用事の少なき時は下婢の身の安樂なる代りに假令平常の日よりも用事多く忙はしき時たりとも可成他人の助を仰かす呟くことなくして萬事間に合せて差支なからしむるの習慣を養はしむべし然れど若し彼等の身躰に恙あるか若しくは非常に疲勞せし時は可成用事を減し休息の時を與ふことは肝要なり

一週に半日とか一夕とか我は日曜日とか日を定めて暇を與へて各自の用事をなすに便ならしめ或は行くべき場所あらば自由に外出せしむ又下婢等其日の用事を濟ませなば夕飯後は取次をなし或は小用をたすべきもの一人家の內に居らば足る故に外出す欲する者あらば何時にても許せども特別の許可を與へし時の外は必ず十時迄には歸宅なす樣定め置くなり彼等の親戚朋友等の訪ね來らば妾は常に快よく彼等を迎へ臺所或は女中部屋に案內せしめて心置なく應接談話せしむれど夜は十時を限り辭し去らしむ又食事時に來らば偕に食事をなさせなどして聊かの厚意を示すを常とす

妾は可成婢僕等の訪ね訪ねられて常に交際なし居る親戚朋友等の知人となる樣勉め若し病者老人或は彼等の仕贈りをなすべき貧窮者ありと知らば時には食物の殘物を贈り或に古き衣類又事情によりては金錢をも施す樣心懸け居るなり然れば婢僕等の多くは妾が厚意を謝し恩に謝し我家の利益を計り親切に働くなり實に彼等の如き身分抵き人々は他人より丁寧に待はれ柔和なる言をかけらるゝは間々あらぬことなれば主婦たる者は常に注意して彼等を憐みいたはり助け以て博愛てふ德

を實行し神の前には貧富貴賤の差別なきことを示すべきなり

彼等若し宗敎信者ならば如何なる種類の信仰にもせよ妾は決して此を蔑視せず禮拜式などには自由に出席なし得るの便宜を與ふる樣心懸け居れり

妾が小兒等下婢に特別の用事をなさしむる時は「何々を持て來い」などゝ傲然に命ずることを許さず「何々を持て來ておくれ」と丁寧に賴ましめ又婢には小兒の命なりとて決して忽にすることなく直に從はしむ

妾は常に箪笥戸棚等に錠をおろして彼等に盜心あるかを疑ふの心を見せず却て彼等を信ずるの心を示す爲め錠などをおろさゞれども未だ些細の物にても紛失せし例なし

女中部屋は他の坐敷と同じく常に片付きて淸潔ならしめ各のため衣類を入れおく箪笥若しくは葛籠の如き物を供へ又戸棚の一分部を定めおかしめ夜具等も可成淸潔ならしめ以て彼等主人の用を終りて已が部屋に退きし時も心地よからしむ

下婢若し下僕に賴むべき用事あるときは直接に乞はしめず先づ妾か許に來りて其旨を告げしめ妾より下僕に命ずとは彼等の間に喧嘩口論など起らぬ樣防ぐためなり

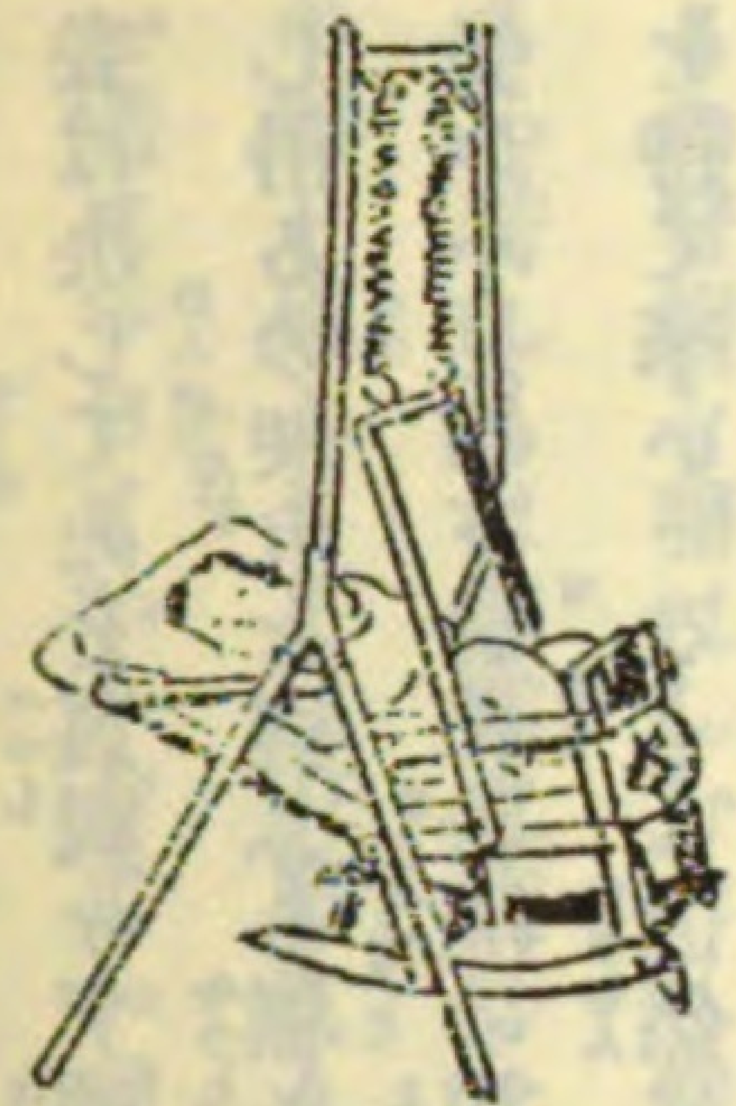
妾病に罹かるか或は旅行などして暫時家事を下婢等の手に任せ置くも彼等は皆忠實に其義務を盡し妾が快復の時或は歸宅の時まで差支なからしむ樣親切に働き居るが故妾再び家事に從事なし初むる時は常に愉快を感し滿足に覺ゆるを得又彼等の內止を得すして暇を取る時は大抵其知人にて代りに來らんと申込む者あるか故に桂庵を煩はすの必要なしされば以上の規則は中々に功少からずと信ず

鷄卵殼の利用

鷄卵殼を利用せんには玻璃瓶の內を洗ふ用にすべし、即ち殼をば適宜の函內にしまひ置き瓶を洗はんと欲する時、之を細末に碎き、其少量を碎きたまゝの卵殼と共に瓶內に入れ熱き石鹼湯を其上より注ぎかけ能く振り動かし而して後洗ひ清むべし

赤兒の睡床

赤兒を睡らするには乳母の脊或は母の懷、或は搖籃或は釣床等を用ゆるが左右動は赤兒精神上の發育に妨けありとて米國にては近來插畫の如き上下動の睡床流行す



手藝案內

毛糸編物

きよ子

圖の如く平面編に桐と菊模樣形を編み出だす臂薄圖の拵方を記さん、但し這は最新の意匠に係るものなり

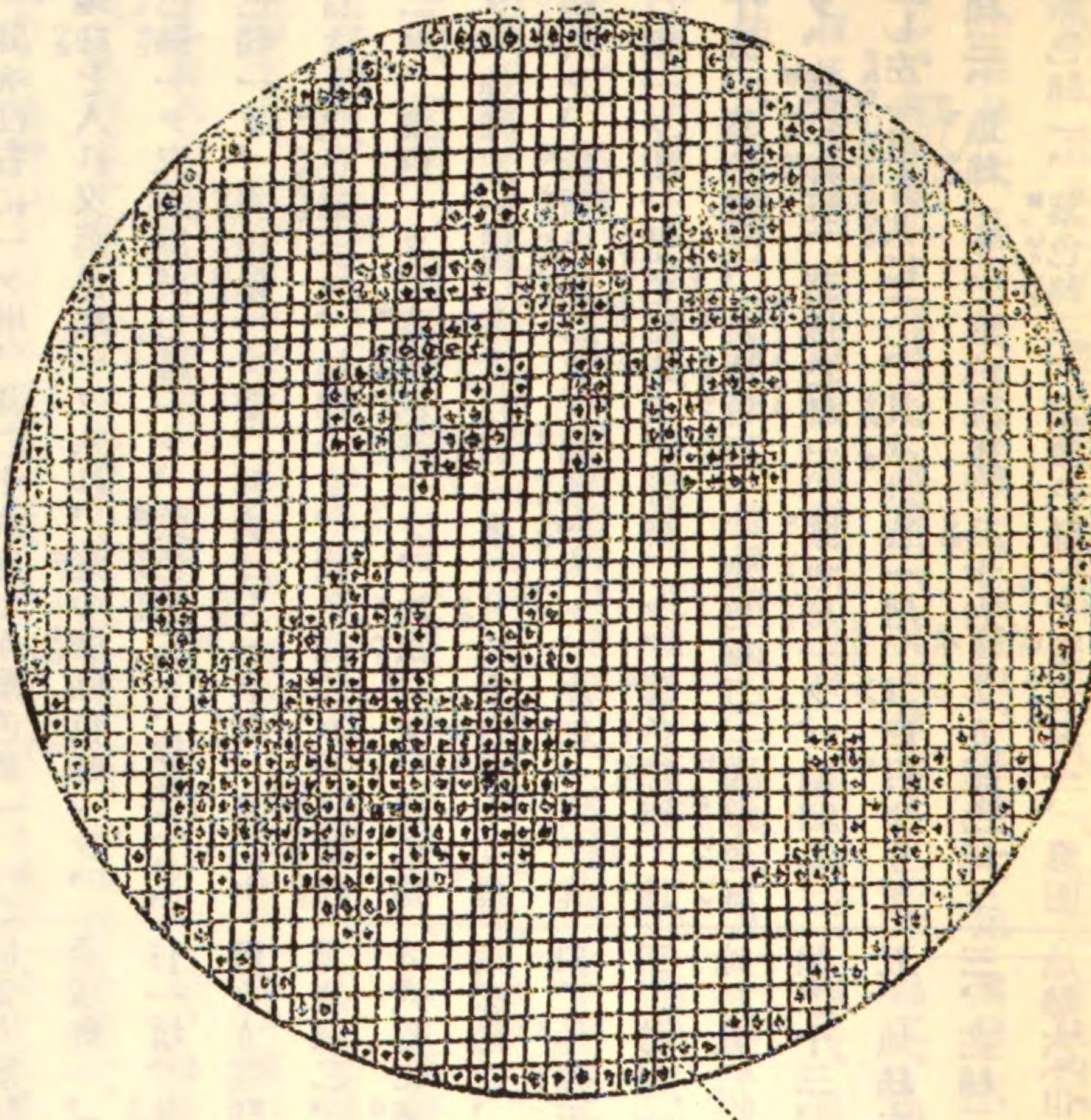
編棒は通常の角にて作りたる頭に鉤ある針壹本にてよろし

毛絲も通常の太糸にて宜しく色彩は人々の好みにより異なれども左の如きとり合せも隨分出來あがり美麗しき事故試み給ふべし

地糸は白茶色、桐の葉鶸色、葉脈綠色、花莖黃色、紫又は淡紫、菊の葉は右を綠色に左を鶸色とし花は桃色又は赤、雌雄蕊は黃にして蕾の下にある莖を海老色とするなり裏絲は表と同じく白茶のかた宜しかるべし

編み方は初めに通常の連鎖編（連鎖編とは引きほどきにて絲の片端を引けば罠の解くるやうにし其の罠を左手に持ち右手に鉤針を持ちて其罠へ鉤針の先を入れて絲を引出すなり）を周圍の數（百〇八）丈長く編みて絲を切り、右四十七目の處より十三帽子編をなし、（帽子編とは連鎖の罠に鉤針を通し絲を輪のまゝ引出して鉤針に掛置き、再び絲を鉤針にかけて針にある罠を通して取り換るなり）て絲を切り、其次は右二増、地絲十九（但左四増）、其次は右三増、地絲二十四（左二増共）、其次は右一増、地絲二十六（左一増共）其次は右二増、地絲三十（左二増共）其次は右一増、地絲三十二（左一増）其次は右一増、地絲二十九日より葉絲二ツ、地絲四（但左一増共）但し絲を換へるときはいつも一ツあとの目にて未だ絲を引き出たさぬうちにつぎかへを爲すべし

あみとまり



あみはじめ

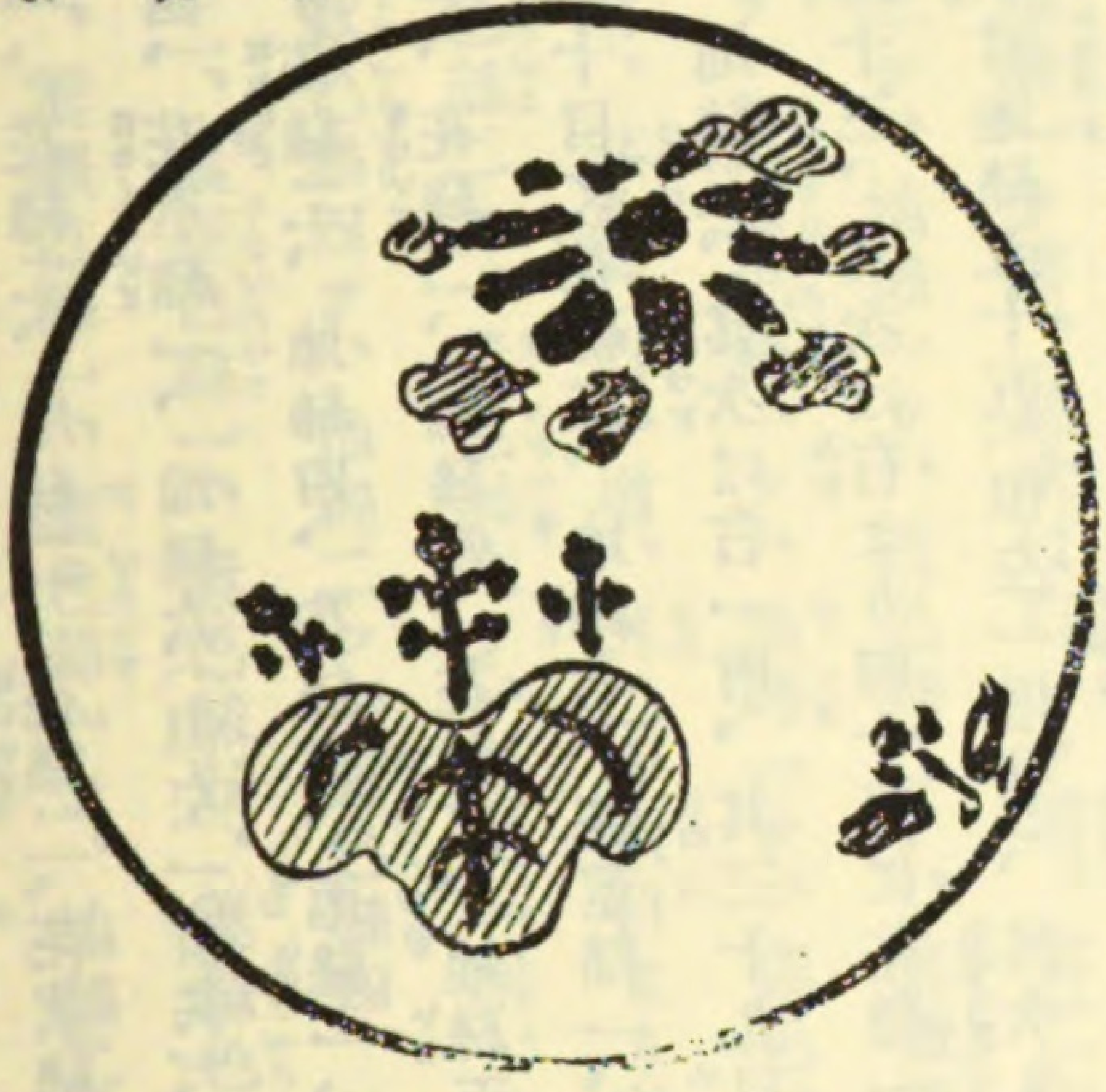
其次は右にて一ッ増、二十九目より葉色絲四、左に一増、其次は右に一ッ増、其二十六目より葉色葉一、二ッ地絲を入れ又葉色絲一ッ入れ、葉の脈絲色絲一ッ、葉色絲一ッ又葉脈絲色絲一ッ、葉色絲二ッ、地絲二ッ、葉色絲一ッ、左地絲一ッ増、其次は右一ッ増、其二十六目より葉色絲三ッ、地絲一ッ、葉色絲二ッ、葉脈絲色二ッ、葉色一ッ、葉脈色絲一ッ、地絲一ッ、葉色絲三ッ、地絲左一増、其次は右一増、其二十六目より葉色絲八ッ、萱脈色絲二ッ、葉色絲六ッ、左に一増、其次は取一ッ増、莖色絲四ッ、地絲二ッ、葉色絲四、地絲十五、葉色絲二、葉脈色絲一、葉色絲五、葉脈色絲一ッ、葉色絲五、葉脈色絲一、葉色絲一ッ、地絲二、(但し左一増分共にて)、其次は右一増、其四目より莖色絲三、地絲一ッ、葉色絲四、其十六目より葉色絲三葉脈色絲一、葉色絲三、葉脈色絲一、葉色絲一、葉脈色絲一、茶色絲五、葉脈色絲一、葉色絲二、地絲二、

(但し左一増共)、其次は右より七目に莖絲一、其二十目より葉絲三、葉脈絲二、葉絲三、葉脈絲二、葉絲一、葉脈絲一、葉絲二、葉脈絲二、葉絲二、地絲二、其次は右一増、其七目より葉絲一、地絲一、莖絲一、其十九目より葉絲四、葉脈絲二、葉絲三、葉脈絲二、葉絲二、葉脈絲二、葉絲三、地絲三(但左一増共)、其次は右より六目に葉絲二、地絲二、蕚絲二、地絲十六、葉絲五、葉脈絲二、葉絲二、葉脈絲一、葉二、葉脈絲二、葉絲四、地絲三、其次は右一増、其七目より葉絲二、地絲二、蕚絲一、蕾絲一、蕚絲一、地絲十六、葉絲十六、地絲五(但左一増共)、其次は右より七目に葉絲一、地絲二十三、葉絲六、地絲一、花莖絲一、地絲一、葉絲五、地絲六、其次は右より三十一目に花莖絲一、地絲三、花絲二、花莖絲三、花絲二、地絲三、花莖絲一、地絲六(但左一増共)、其次は右より二十八目に花絲二地絲一、花莖絲一、地絲三、花絲二、地絲一、花莖絲

一、地絲一、花絲二、地絲一、花絲二、地絲一、花絲二、地絲三、其次は右一增、其二十九目より花絲二、花莖一、花絲二、地絲五、花莖絲一、地絲四、花絲二、地絲一、花莖絲一、花絲二、地絲三、其次は右より三十一目に花莖絲一、花絲二、地絲二、花絲二、花莖絲三、花絲二、地絲四、花莖絲一、地絲六(但左一增共)、其次は三十目より花絲二、地絲四、花絲二、地絲一、花莖絲一、地絲一、花絲二、地絲四、花絲二、地絲五、其次は右より三十目に花絲二、地絲七、花莖絲一、地絲七、花絲二、地絲五、其次は右一增、其三十九目より花絲三、地絲十三、其次は右より四十目に花絲一、地絲十四、其次は地絲五十五(但左一增共)、其次も同く地絲五十五、其次も同じ、其次も同じ、其次は右一減、地絲五十四、其次は地絲五十三、左一減、其次は同じく地絲五十三、其次右一減、其三十一目より葉絲三、地絲十九、其次は右より十七目に葉絲五、地絲九、

葉絲四、地絲十七(但左一減)、其次は右より十八目に葉絲四、花絲一、地絲三、花絲二、地絲三、花絲一、葉絲二、地絲十八、其次は右より十九目に花絲三、花絲二、地絲二、花絲二、地絲二、地絲二、花絲二、地絲三、葉絲三、地絲十四、其次は右より一減、其二十一目より花絲三、地絲一、花絲二、地絲一、花絲三、地絲一、葉絲五、地絲十三(但左一減)、其次は右より十六目に葉絲三、地絲三、花絲二、地絲一、花絲二、地絲一、葉絲六、地絲十三、其次は右一減、其十五目より葉絲二、花絲四、地絲一、花絲一、地絲一、花絲二、地絲一、花絲一、地絲三、葉絲四、地絲十三(但左一減)、其次は右より十九目に花絲三、地絲六、花絲五、地絲十五、其次は右一減、其二十二目より蕊絲三、地絲一、花絲三、地絲十七、(但左一減)其次は右一減、其十三目より花絲六、地絲一、蕊絲五、地絲七、葉絲二、地絲十(但左一減)、其次は右より十三目に花絲六、

地絲一、蕊絲五、地絲一、花絲六、葉絲一、地絲十一、其次は右一減、其十一目より葉絲三、地絲六、蕊絲三、地絲二、花絲六、地絲十一(但左一減)、其次は右一減、其十目より葉絲三、地絲二、花絲三、地絲二十二(但左一減)其次は右一減、其十三目より花絲四、地絲一、花絲二、地絲一、花絲四、地絲十三、(但左一減)、其次は右一減、其十目より葉絲四、地絲一、葉絲二、地絲四、花絲二、地絲十三(但左一減)、其次は右二減、其七目より葉絲五、地絲一、葉絲一、地絲十八(左一減)、其次は右一減其六目より葉絲四、地絲二十(左一減)、其次は右二減、其



出來上り

五目より葉絲二、地絲二十(左一減)、其次は右二減、地絲二十二(左二減)、其次も右二減、地絲十七(左三減)、其次は右三減、地絲十(左四減)。

裏の編みたるも表と同樣に爲し、編み終りたれば貳枚合せて表より雙方の目を通じて、ミシン編(こは帽子編の如くなれども唯釣針に掛けずして初に一ツ掛りわる處へ直ぐ絲を通すなり)をなし、三分の二程合せたれば適宜に綿を入れ、其より矢張前の如く編みて合せ終るべし。

挿畫せる圖案は頗る縮小したるものゆえ不完全なれば此の詳解を附す

社交一斑

流行の栞

流行子

夏衣

◉綛の世界　本年度衣の流行品は羽織、衣服、帶、袴に至るまで綛を以

て一着を揃ゐ得らるゝに至しかば蓋し本年の新流行なるべし、羽織は五本絽を丸の一寸二分大の五ッ紋に染め衣服を鐵色地、淡利久、紺地、鼠色等の大名、薩摩筋、千筋の内に撰み、帶をお納戸、藍鼠地に白の獨鈷、一本筋、獻上、鎧縞の内に好み、袴を紺地、淡鐵、利久等の棒縞、鎧縞、薩摩筋の内にし、襦絆を胴と袖とを白絽にし、胴裏に薄地絹フランチルをつけ、襟を素鼠絽にせば男子絽づくめの夏服として最上のものなるべし(以上一揃の價五十五圓前後)

◎贅澤なる羽織　(男物)白絽薄地のものを黒の五ッ紋を無双に染め、脊の部を富士に上天龍か、松島、明石、須磨などの風景模様を淡泊に現はせしもの昨今の袷時代より單物時代にかけて流行の傾向を有す價廿圓前後なりと(女物)婦人社會には暑中は羽織を着するものは僅に老人位に止れと昨今の時候に贅澤を好む一部の社會に流行するは、絽縮緬を黒の無双にせしもの(紋は五個所大きさ九分)脊の模様を疊給の牡丹、月に梅、本紅の旭日に疊給ののぞき鶴などが流行の上地位を占む價二十五圓前後なりと

◎普通の羽織　(第一)博多絽(第二)壁糸織(第三)鴨川上布(第四)銘線等柄は小豆、利久、素鼠、紺地等の大名、千筋、萬筋、薩摩筋等價格は(一及二)は八圓ゟ十二圓(三)七八圓(四)三四圓稍地の薄きものは暑中にも着する例の越後數寄屋價二圓以上地の厚きは縞セルなり昨今此羽織を着するもの能く見受けらる(價五圓前後)以上男物たる言を俟たず

◎厚地の男帶　貴族的には夫の羅紗なるが昨今はこれよりも一層地質の厚き所謂厚板錦といふもの流行し始まりぬ柄は鶸茶、鼠茶、鼠色等の地色に友色又は白茶色にて實づくし、龜甲つなぎ、分銅形等(價十五圓前後)

◎薄地の男帶　最も薄きは筑前博多の單帶價三圓位次は前記の縞絽(價七八圓)次は八王子博多の袋織(價八圓以上十圓)柄は壁鼠、鼠色、お納戸等の無地か又は獻上、獨鈷等多數を占む

◎意氣なる丸帶　小柳繻子、五本絽の鼠色、御納戸、淡小豆、鳩羽鼠等の地色に白の片側獨鈷、片側獻上を織り出せしもの(價十五圓前後)

◎高尚なる丸帶　羅紗の薄地の肉色、鳩羽鼠、淡小豆、お納戸等の地色に實づくし、古代松竹梅、蓬莱山等の大模様は令孃向にして黒地又は鐵色、鼠色地に友色の蔦唐草模様など令閨向(價十三圓ゟ三十圓迄)

◎男子の單衣地　(第一)紋織御召(第二)平御召柄は淡鐵又は紺地に白の石目、斜萬筋、立蟳(第三)縞御召(第四)壁糸織(第五)縞絽(第六)銘線、柄は紺地、淡鐵、淡利久、等の地色に白の萬筋、千筋、子持筋等(第七)結城紬、柄は紺地に白のさばけ大名、千筋、薩摩筋、微塵、はけ目及紺地の十の字絣價格は(第一)十七八圓(第二)十三四圓(第三)十圓前後(第四)同上(第五)十二圓前後(第六)四五圓(第七)縞物七圓より九圓絣八圓ゟ二十圓

◎婦人の單衣地　(細君)高等なる流行品は豫て數々記せし紋織御召に越すものなし柄は紺地、淡鐵、淡小豆、行儀あられ、大小あられ、屋根板、斜うろこ、斜よろけ、割山椒等(孃)同品の鳩羽、お納戸、鼠色、紺

地等に白の波に千鳥、龍田川、菊水、立わく、葛玉、あやめ等（價十五圓乃十九圓）次に町家向には縞お召なるが（細君）淡色地に微塵、千筋、さくさ、くづし、又は紺、お納戸地の雨絣（嬢）白地、鳩羽、紺、お納戸地等の濃縞、松魚縞、大薩摩、矢がすり等（價十圓前後）次は銘線なるが質素なるものにては白茶、利久地等のさぐさ、くづし、千筋、薩摩筋、派手なるものにてはお納戸、紺地、白地等の井桁がすり、濃縞、大薩摩、亂立等（價五圓乃七圓）以上重なる流行品及流行柄

◎**絽の禮服**　淡利久、壁鼠の三ツ紋の上着に白絽の下着を合はせしものは細君向にして鳩羽鼠、淡小豆、淡葉柳の前身ごろより衽にかけて一尺七八寸の高さに風景模様を染めしものを上着とし（紋は無論三個所）之に淡桃色絹を下に重れしものは孃君向なるは言ふまでもなし價一揃二十圓前後

◎**夏の長襦袢**　絽縮緬を前記の色を年齢に應して無地又は裾模様に染め半襟を白絽縮緬の金糸又は白糸にて縫模様あるものをつく（價十圓前後）

◎**絽縮緬の半襟**　細君には壁鼠、淡利久の小模様孃君には淡小豆、鳩羽鼠、淡葉柳等に白にて亂花模様を現はせしもの本年の流行（價一かけ五十錢以上一圓）

◎**本年夏物流行の色及柄**　概言すれば色合に於て壁鼠、淡利久、淡小豆、鳩羽鼠、小紋に於て斜うろこ、斜よろけ、立わく、霰、花模様に於て龍田川、菊水、葛玉、あやめ、亂菊、牡丹等縞柄に於て（男子）萬筋、千筋、はけ目、薩摩筋、微塵、（婦人）さくさ、崩し、子持筋、さほけ大名、濃縞、松魚縞、絣に於て十の字、井桁、並矢、違矢等木綿物の柄は以上の流行標準さ大差なし

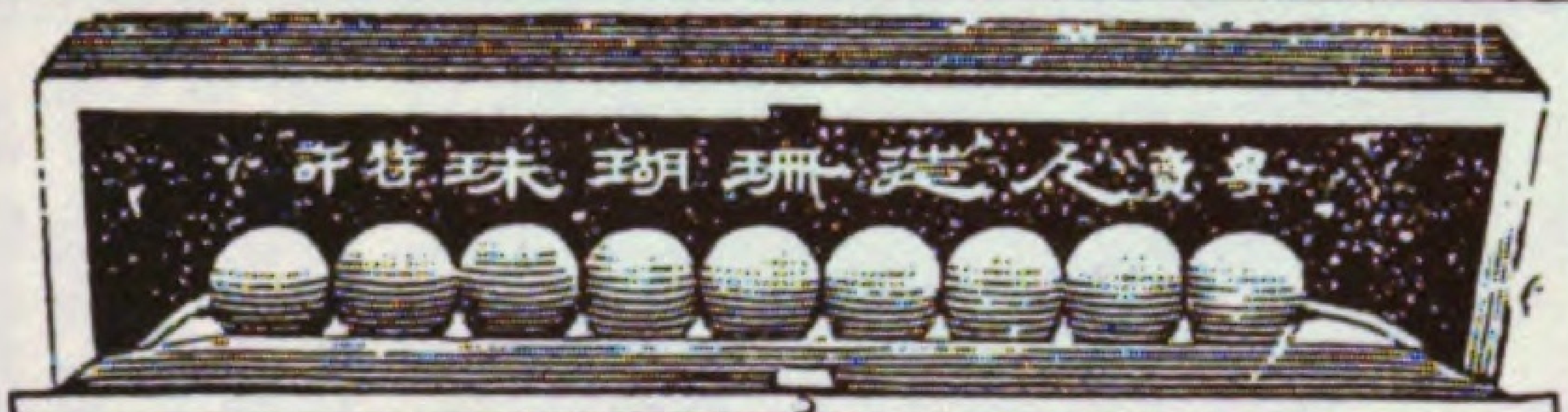
次號には暑中着を詳細に案すべし、因曰く、例年の通り白木屋に於て六月一二三日夏物大賣出を行ふ、大丸に於ても同しく賣出し

雜録

藤原百川（口繪解説）

光仁帝の儲君を定むるや群臣稗田親王を立てんと欲す參議藤原百川獨り之を不可とし山部親王を以て之に代らんとす藤原濱成不可とし議して曰く山部親王は其母賤人なり宜しく稗田親王を立つ可しと百川聞て大に怒り劍を撫して叱して曰く儲を立つる賢を以てす何ぞ其出の貴賤を問はず況や山部親王令聞一世に卓出するをやと光仁帝答へず起て内に入る百川聲を勵まして曰く聖斷を承けされば臣背て退かずと確に執て退かず殿前に立つこと四十餘日帝其精忠に感じ遂に山部親王を立てゝ儲とす桓武天皇是なり時人皆其忠烈を稱す

◉社告　編輯上の都合により今號には論説、科學、群書解題、英文一斑、寄書百珍、歌花の五欄を省く



專賣特許 人造珊瑚珠

	二分丸	三五丸	四分丸	四五丸	五分丸
根懸之部 甲號	六十六錢	一圓廿錢	一圓八十錢	二圓七十錢	四圓
根懸之部 乙號	三十三錢	六十錢	九十錢	一圓卅五錢	二圓

	四分丸	四五丸	五分丸	五五丸	六分丸
緒〆簪玉之部 甲號	二十錢	三十錢	五十錢	七十錢	一圓
緒〆簪玉之部 乙號	十錢	十五錢	廿五錢	卅五錢	五十錢

近頃專賣の人造珊瑚なぞさ申上粗惡の者差上候者有之候間何卒特許人造珊瑚珠さ御尋ね特許番號第一九一八號を御認の上御購求の程奉希候

爲替は下谷局並に神田局兩所宛郵券代用は必ず一割增のこさ

東京神田須田町六番地

鼈甲珊瑚珠類
小間物 商 長岡商店

電話本局三五〇

貴金屬及
美術袋物 商 玉寶堂

東京下谷池の端仲町

全國有名の各袋物商店小間物店に於て販賣す

電話本局九百六十五番

近刊豫告（製本中）

井原西鶴

定價廿錢　郵稅四錢

奧參軍中將題字　東條陸軍中佐序文

兵營小訓

定價十五錢
郵稅四錢

德富猪一郎編，久保田米僊畫

誕生日

第十版發刊廣告

定價
上製二十錢
並製十五錢
郵稅四錢

第一第二合本日本語本全

クロース
上製
金文字入
定價十錢
郵稅二錢

發行所 東京 民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行